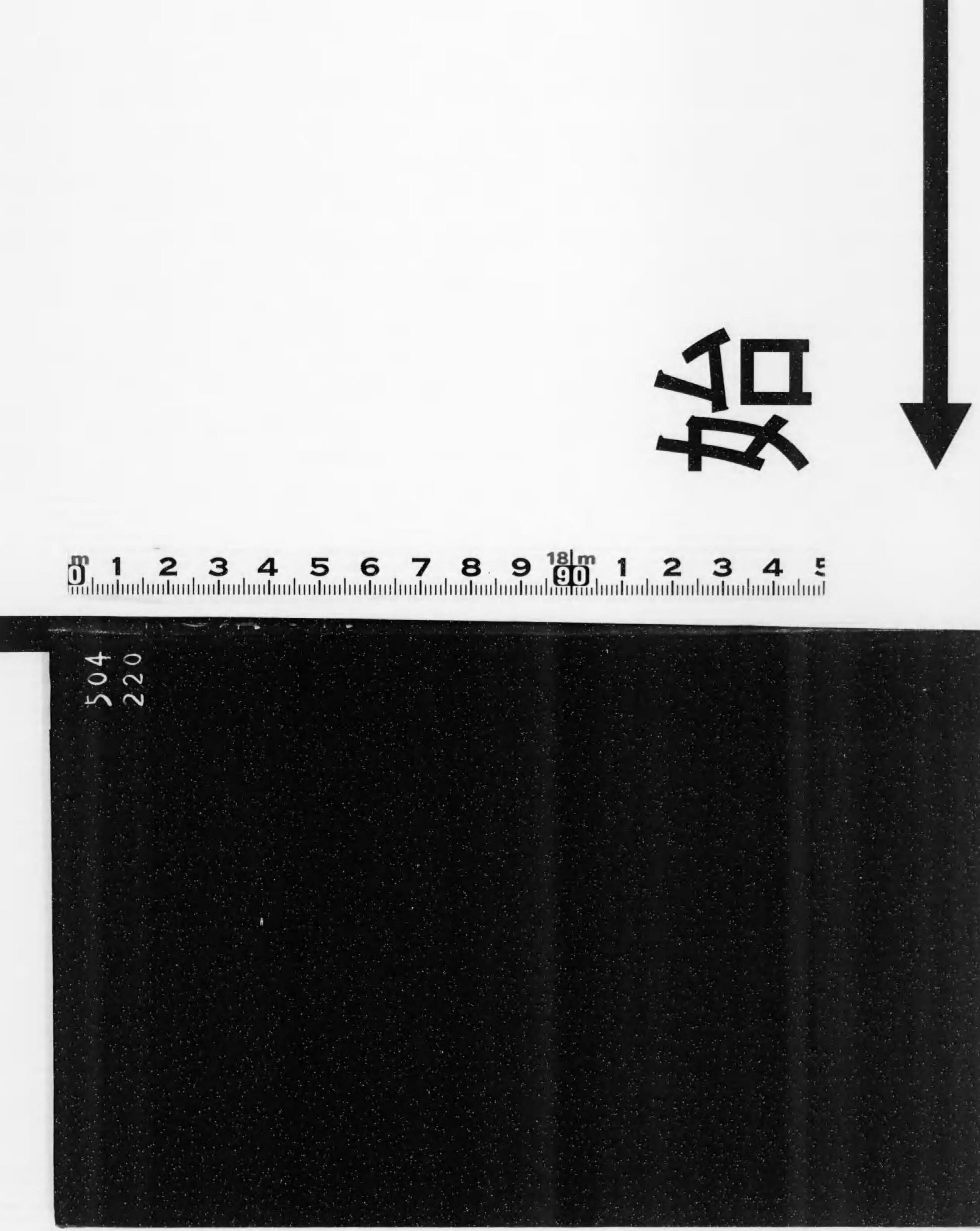
504
220

36. 3. 31

504-220

# 共通を求めて

大正
12.7.27
内交

# はしがき

この小集は友人木村君の止むなきお勧を直接の御縁として
その編刊に同意したものであります、何れも久しい以前に千代
田高等女學校、遞信省講習所、杏林舍、銀行集會所等諸處で試みた
講演を何時の間にか友人の方々が筆錄しておいてくださつた
ものであつて、一つも自分自身が筆を操つたものではないので、
その趣旨内容は勿論自分から出て居るのではあるが一切の勞
作は友人の方々の御親切から出來たものであります、今日これ
を公にするとすれば内容形式ともに十分刪補を加ふべきもの
でありますが、但しこの度は木村君の仰に盲從し凡てを同君にお

任かせ致した様なわけであります、何時も乍ら私の怠慢に就て深く恥ぢ且つ謝せざるを得ないのであります

先考、離言院の第十三回忌と篤照院の第三回忌とを修せむがために盛岡に歸へらむとする前旬日

大等識す

# 共に道を求めて

目次


一、修養第一の書……一
二、聞法の用心……二九
三、聖教を讀むとき……五〇
四、聖道と淨土……六三
五、二重の人生觀……七〇
六、知恩報恩……七六

# 共に道を求めて

## 修養　第一の書

人間の身と生れるのは、眞に容易な事ではない、實に千歳一遇の幸慶である。此の幸慶を身に負ふては、私共はそれを空うせず、自ら其の意味を圓かに充すやうに、修養に力めたいものである。生活を善く清く美しく送つてゆきたい、それでも、終には必ず死ぬべき者であれば、其の死後にまで亘る永久の問題を解決して置きたい。どうかして、道徳的に

も、宗教的にも、御法に契ふやうに眞面目に修養に力めて、人間として生れた御縁を、空しくしないやうにしたいものである。

然らば、修養に力めるには、如何したならばよいであらうか。それには種々の方法もあらふが、先づ第一にはなるべく、屢、崇ひ人格の方にお目に掛つて、直接に、其の方の自然の感化を蒙るに如くはない。信篤く德高き方は、私共を心の奥から見徹して、其の到らざるを導き、其の缺けたるを足し、其の過ちを正し、其の苦みを慰め、かくて、動もすれば道に迷つて墮落しやうとする私共を、雄々しく、慶ばしく、誠の道に引立たせて下さる。自分の心底からお慕ひ申すお師匠様の御德に光らされて、私共が、よく御法を聞き御法に生きゆく事は眞にありがたいことである。

然るに、此の事は古來から最も難い事とされてゐる。それは、人として斯の如き德高き方にお遭ひ申すのが難い、お遭ひ申しても、始終、其の方のお側に附いて居ることは、千萬人に一人しか許されない。遇、其の方の御德に照らされて勇み立つかと思へば、後には周圍の汚れた境遇に染められて、心が濁され勝ちである。どうも願の通りにならぬものである。

それで、もう少し手近い方法を求めると、修養に志す善き友達が集つて、前に同じ道を辿り給ふた先生の方々から、その修養に就いての御話を承つたり、また、お互に心を打明けて、經驗を語り合つたりして、そして、人生について、生死について、平生の日暮しについて、死後の行き方について、種々の崇い理想を知り難有い教法を解し、それを親しく身に體するやうに努める事が大切である。

然るに、此の事もまた容易には出來ない。或は、同志の會が結ばれるにも、結ばれてから名士の講演を請ふにも、又、是を連續して行くにも、色々の差障が起るもので、どうも難しい事が多いものである。

是等修養の仕方に都合よき方法にも、猶、併せて採るべき方法がある。それは

讀書である。道德の上に、信仰の上に、私共を敎へる所の多い良書を選んで、晨夕、之を讀むことである。かかる良書は、孰れも、偉いなる人格の方々から生れ出たものであり、その方々の高い德風を傳へ、又、其の深い敎法を明らかにして下さるものである。かかる良書から、私共は、かの偉いなる方々の崇いお心や、平生のお覺悟やを伺ふことを得て、私共の種々の問題を解いて頂くことが出來る。然も、德の高い方に面りお近付きになる機會は屢〻得らるるものでなく、また、お話も然う度々は聞き得られず、難有い御法話も、日を經るにつれて忘れてしまい易いものである。それに比べて、書籍だけは、何時でも、自分の机の上に備へて置いて、悲いにつけ、嬉いにつけ、病の時でも、孤獨の時でも、忙しい時でも、閑な時でも、何時如何なる場合でも、それを繙ひて直にそれから確かな御敎を拜見することが出來る。最も簡便に、最も有效に、最も卒直に、最も親密に。

道德の上、信仰の上に尊い御敎を與へて下さるこれらの書籍に、不斷に親んでゐる方々には、ありがたい事には、自然に、德の香りが薰り込んでしまつて、其處から美しい心と行とが自から湧いて出るやうになる。かうなつて、やがて修養の高いと言はれる品性も生れて來るのである。されば、修養に志すものは、一日も讀書を廢すべきでなく、常に心して聖賢の書に親まねばならぬ。

それに就て問題がある。それは修養の方法として讀書が大切であるといふけれども、書籍は昔から數限りもなく世に出てゐるし、又、現に每日幾百部の著書が新に世に顯はれつつある。そんな眼眩しい程澤山ある書籍の中から、如何にして修養に適すべきものを選び擇らうか、即ち、書籍の選擇といふ事をどうしたら宜しいか。書籍の中には隨分つまらぬものも少くない、若い心の方々が讀んで益するどころか、却て、損をするやうなもの、折角生れたままの淸い心が、それを讀んだ爲に、甚しい汚穢に染まされるといふやうなもの、人格を善化し美化せずして、却て、惡に誘ひ醜に陷れるやうなものさへ少からぬ。かかる事情の中に於て、

如何したら間違なく、有益な書籍が得られやうか。爰に書籍の選擇といふ問題が起つて來る。

素より、諸科專門の學問・技藝の事については、古きものより古きものを取る。新しい書籍は、我々の道德上、宗教上の修養に關することであつて、かかる書籍の選擇については、私は、次の三つの標準に據つたら大概間違はあるまいと思ふ。

一。新しきものより古きものを取る。新しい書籍は、知識や技藝の諸方面については、古きものよりも優れる所が多いに違ひない、けれども、我等の道德とか、宗教とかといふ重要なる修養の問題については、古ひ物をとりたい。それは新しいものに、絶對良書が無いといふのではない、けれども、其等の概ねは時と共に廢れ行き、忘れ去られるものである。然るに、昔から修養上の良書として、聖典として傳はつてゐるものは、幾十年幾百年乃至幾千年の歳月に亘つて、滅びず朽ちず、永へに人々の精神を感化し向上せしめて居るものである。これ、其の書に不朽の價値があればこそ始めて然様になり得るのである。我等の修養の問題が永久の問題であるから、其の解決を教へていただく書籍も、亦、永久に價値の認められたものであらねばならぬ。

二。古書の中でも、遍く世間に其の價値を認められた圓滿なものであつて欲しい。卽ち、如何なる人にも、如何なる境遇にも、如何なる事情にも、廣く遍く行き亘つて何處にも妥當するやうな極めて圓滿な教でなければならぬ。我々の性格や、教養や、事情やが千差萬別であるのみならず、同一人であつても、一生涯の中には何時如何なる境遇に陷らぬとも限らない。平生に道德上・宗教上の修養に資する書籍の內容は、是等如何なる場合にも遍く融通のきくものでなければならぬ。卽ち、世間に廣く其の價値が認められるといふことは、其の書の內容が斯の如き性質のものであり、あらゆる方面に亘つて圓滿なものであるから始めて可能なる事なのである。

三。斯く、久しく又廣く貴ばれてゐる、卽ち、不朽に圓滿であるといふ他に猶一つの大切な條件がある。それは卽ち其の多方面に融通せる圓滿なる性質を以して、更にそれが徹底的であらねばならぬ。言換へれば、其の一切の敎が、簡潔純粹なる唯一の原理によつて、根本的に統一されて居らねばならぬといふ事である。我々の道德上・宗敎上の修養は、かく根本に一個動かすべからざる基礎があつて、それが諸事萬般に應じて無碍に働いて行くものでなくては役に立たない。此の徹底的・統一的といふ點からいふならば、かの有名な論語といふやうな書籍さへも未だ以て完璧とは評し難い。論語は、如何にも古昔から、遍く世に珍重されて來た書籍である。聖人孔子の言行錄として我々の道德的修養の上に眞に尊重すべき聖典である。其處には、日常の生活の上に、家に處り世に働く上に、幾多の高い敎と親切な誡とを讀むことが出來る。また聖人の人格が吾々の模範として描かれて立つてゐられる。けれども、遺憾ながら、其の多方面に圓滿なる敎訓を貫く一個根本的の生命と力とが與へられてゐない。否、孔子其人には斯の如き一貫の道は存して居たに違ひなからうが、それが何であるかを遍く我々一般に會得せしめて呉れない。然るに、我々に取つて大切なのは實に此の點である。此の點は畫龍に點ずる睛である。魂である。これが無ければ折角の美も死せるものに過ぎない。論語は我々に向つて日常道德の美しい繪を與へてくれる、けれども、其の根柢に是等一切を活かす光線と大氣とは殆ど語る所がない。その根本の宗敎的信仰は、卽ち、これ一切の修養の最初のものであり、而して亦最後の事柄ではないか。

斯の如く思ひ來つて、私は諸〻の古書の中、茲に謹んで、特に、『蓮如上人御一代記聞書』二卷三百十四條を推讚したてまつる。此の書は、蓮如上人の御子・御弟子の方々が記し遺された上人の言行錄であつて、昔から世に「佛敎論語」としてもてはやされ來り、特に淨土眞宗の家庭にあつては、大切な御聖敎として拜讀され

來つたものである。

蓮如上人は、親鸞聖人から第八世の御法孫にて在しまし、今を距る五百年程前に生れ、四百二十餘年程前に寂せられた壽八十五歳、ちようど足利義持より義澄に至る亂世に活動せられ、微々として振はざりし宗風を、其の一生涯の千辛萬苦の御努力によりて隆々たらしめ、遂に本願寺をして佛敎諸宗中の最大なるものたるに至らしめたる基を作られた方である。其の御德の故に、昔から、祖師親鸞聖人の再現であり。宗派中興の祖であるとして仰がれて在すのである。其の御生涯の御苦勞と御德とは、讃へても讃へ盡されぬのである。今は唯、其の言行錄である『御一代記聞書』を諸種の方面から推讃し奉りたいと思ふ。

**第一**。此の書は、其の上に被てゐる衣の方から見ると、如何にも簡潔にして力あり、自然にして感化力ある文學的特色を具へてゐる。上下二卷、三百十四條から成つてゐるのであるが、其の一條一條が極めて簡潔にしるされてゐる。或は一





二行、長くとも六七行の短い文章の中に、折に觸れ、時に應じて、その偉大なる人格から流れ出た言葉や行やが、汲めども盡きせぬ味を含んで顯はれてゐる。ちよつと一行の文字を讀んだだけで、既に餘韻嫋々として深く遠く心胸に徹する感銘を覺えざるを得ない。しかも、其の書き振りは、決して技巧を以て、强ひて其の様に作り出したのではない。其處には、焦燥苦慮の彫琢の跡は少しも存しない、唯、雲の岫を出づる如く、水の溪を下る如く、澄明なる天眞が自然に流露して、讀む者は唯何故とも無く、何時とも知らず、不知不識の間に、しつとりと、法雨に潤されてしまふやうな有様である。

斯る自由微妙なる短い文字、そして、深い强い感銘を與へる潔い言葉、是等は此の書が永久に人心を引き付けて止まない所以であらう。しかも、それは特に現代の我々に向つて殊更の意味を有してゐるかのやうに思はれる。現代は悠々閑々として居られない時代である、日常の生活に於て、一切の事が非常な激しさを以

て壓迫して來る、隨つて、思想上の問題など落着いて確りと考へてゐる遑さへ無い程に慌しい有樣である。かかる慌しい境遇に居て、それに相應して活動して行かねばならぬ我々に向つて、日常の敎訓と指導とを與へて呉れるものは、難解難知なる哲學的文字や、趣味もなく砂を嚙むが如き道德的訓誡では殆ど間に合はない。此の點に於て、奥妙なる哲理、親切なる宗敎を、趣味津々たる文字を以て天眞自然に徹到せしめられる此の書の如きは難有しとも難有い書物である。

**第二**。斯る衣を被てゐる此の書の內容は、圓滿にして而も徹底的である。圓滿であるといふことは、上人八十五年間に亘る長い歲月の間に、人生のあらゆる辛慘を嘗め、困苦を經て來られたその體驗の結果が、此處に自然に流露してゐるからである。此處には、宗敎も道德も、經濟も衞生も、又は、家庭內の事も世間的社交上の事も總べて觸れられてゐる。親子の間、夫婦の間、師弟の間、朋友の間主僕の間、凡そあらゆる人間的關係の事柄に就いて、如何にあるべきかの道が自然無作に示されてゐる。生くる營みの事、病める煩の事、老いたる日々の事、死の行末の事、凡そ人間一生に亘る久しい問題が、悉く明かされてある。未來永劫の大問題が大膽に解決されてあるかと思へば、同時に、一片の紙屑に對しても之を如何に取扱ふべきかが親切に敎へられてある。そして、それらは總てかくせよといふ訓誡的命令的の言葉に於てではなく、唯、子が慈父を慕ひ、弟子が恩師を懷しむ讃仰慶歎の言葉に於て表はれてゐる。それによつて我々は、人生百般の事柄に亘つて美しい思慕憧憬の念の裡に深い感銘を與へられ、自然と道に引き付けられるのである。又此の圓滿なる敎訓は、如何に多方面に亘つて居ても、決して散漫にはなつて居ない。生死の問題から、紙屑一枚の取扱に至るまで三百十四條に亘る燦爛たる錦の織布は、一々皆如來の御慈悲を飽くまでも頂かれたその信の糸によつて織り成されてある。根本は唯一つ、佛親の大慈の信のみである。此の信が多方面に亘る一切を貫いて、少しの曖昧もなく、少しの不分明もなく之を

統一してゐる。我々は、之に依つて圓滿なる敎訓を徹底的に味はせて頂く事が出來る。多方面に向つて、行く處として善美ならざるなき姿に恍惚として見とれながらも、その善美の眞實の淵源は唯一つであり、而して、其は同一に親密に、我我自身をも潤して下さる佛の慈悲であるを思へば、迷なく疑なく、自然にその淵源を汲むことが出來て、己が修養上大なる安住の地を與へられるのである。

**第三。** かかる簡潔雄勁自然なる文字に盛るに、かかる圓滿徹底せる內容を以てしたる此の書は、其の一切を以てして、此の書の主人公の人格と、理想的の諧調を保つてゐる。これは修養の書に於て特に重要なる事柄で、口や筆では外面的に美しげなこと、巧妙さうな事を幾らでもいふ事が出來る。けれども、それがこれを言ふ其人の人格と合つてゐないならば、却て欺僞を敎へるのであつて、眞に修養の書としての價値は存しないと言つてよい。修養の書として我々を動かすものは、其の筆と其の人とが、完全に一致してゐて、其の間に毫しの齟齬も矛盾も存しない點にある。

此の書は、上人の晩年に於て書き記されたものである。現に、其の第一節は明應二年正月、卽ち、上人七十九歲の時の記事であつて、これより八十五歲示寂に至るまで晩年數年間に於ける言行錄が此の書を成してゐる。卽ちこれ、上人が八十年の御生涯を送られ、其の間唯佛心の大慈にほだされまゐらせて、法のため人のため、一切の艱難辛苦を身に經たまうて、既に全く圓熟し切つた境界に住はせられた時の言行錄である。既に耳順の後、また心の欲する所に從つて矩を踰えずといはれた聖人孔子の七十歲よりも、更に十年の鍛鍊を積まれた時代の記事である。勿論、上人幼少の頃の記事も交つてゐるに違ひない。然し是もまた上人が晩年の境界から昔を回顧し、是を意義あるものとして、其の圓熟せる頭腦を濾過せしめて說示されたものであるが故に、此處にも、やはり、その圓熟の姿は徹して見えて居る。是れ卽ち、當時の上人の人格と此の書に現はされた事柄との間に、

もしくは、上人の到達せられた境界と此の書に述べられた思想との間に、少しの矛盾も間隙もなく、完全に一致し諧調してゐる所以である。

また、筆者の側から考へても、此の書に現はれた上人の御言葉は、上人の弟子公達の方々の前に公開された上人の平生の御生活と微妙に諧調し、此の書に現はれた上人の御行狀は、この方々の心に刻まれた上人の平生の御教と美しく融合し兩者の間に毫末の矛盾も存せざることなるが故に記し得られたのである。此の方面から見ても、此の書が人格と記事との間に如何に美しき自然の親和を保つてゐるかが想はれる。

實に此の書は、蓮如上人の御人格を遺憾なく表現し活躍させて居る。人格的感化の深奥と親切なりし上人の事なれば、是を自分ばかりに私しては勿體ない。かかる有難い方の言行は、是を廣く世にも傳へたいとの美しい弟子達の念願から出たことであらうが、上人の言行錄としては、此の書の他に『實悟記』『遺德記』『空善日記』等の著がある、中にも此の『御一代記聞書』の如きは、是等を集成したものといふべく、眞に上人の言行をさながらに傳へて遺憾ないものである。

此の書だけを通じて見ても、上人の人格の諸〻の方面が深く吾々に感銘を與へつつ活躍して居る。卽ち、上人が如何に逆境の人で在したかといふこと。四十三歲に至るまで、世に隱れたる身として家庭的の悲慘を痛ましい程に嘗められ、險惡なる人情の機微に慘くも弄ばれ、燈を點ずることもならず、月の光に密かに書を飜かれ、人を傭ふこともならず、御自分で幼童の襁褓さへ洗はれ、肩の破れた御衣を召された事など、今讀むも御痛ましい程である。そして、既に御家を繼がれてからは、微〻として衰へ果ててゐた宗風の興隆のために奔馳せられた爲に、叡山の山徒からは嫉視され、迫害され、國主大名からは叛徒と疑はれ、攻擊され、居を焚かれ處を逐はれ、屢〻、僅かに身を以て祖師の御像と御聖典とを擁護しつつ山に遁れ野に忍び、慘憺たる艱厄と戰はれたことなど、眞に其の御生涯は、逆境との

戰に於て過され、而して、終に是に打克たれた記錄である。

又、上人が如何に精力絕倫の人で在したかといふこと。是も此の書の處々に現はれて、上人の御一代を伺へば、前述の如き悲慘困苦の境遇に居られながら、一難に遭はれる毎に、益〻新たなる勇氣が御心の奥から起つて來たやうであり、迫害が度重るほど愈〻雄々しい力が、御身に充ち溢れ來たやうである。四十三歳にして宗主となり、四十七歳にして宗祖聖人の二百年忌を營まれて以後、難を避けて轉々として居を移されつつ、而も、その到る處に人民を敎化し、宗義を弘通して、爲に寺院を建て祖堂を設け、示寂に近き年に於て大阪に一宇を建立し給ひ、終に最後の床にまで不斷の努力精進、不休息の勇往奮闘、まことに寧日もなく活動し給ふた。その生涯の御苦勞の記念は、尊くも痛ましくも、上人の御足には草鞋の紐が喰込んだ御痕の留まつたといふ事が記されてある。是に就いて思ひ出すことがある。私の故郷の御門徒に、村井勘兵衞といふ舊家がある。其の家の老婆は深い信仰に立つて臨終まで活動されてゐたが、其の臨終の床に於て、私はそのお婆さんの手を取つて最後の御別をした、其の時始めて氣付いたのは、その老婆の手の指の端が固く凸くなつて居た。これはどうした事かと問へば、この老婆が毎日、何もせずにゐては勿體ないといふので相當資產家の身分でありながら其の家族から多勢の召使皆々の着物をば出來得る限り總て自分一人で縫ひ又繕ひして、寧日なく働いて居た譯である。といふ。是を聞いて私は、端無く蓮如上人の御足に、草鞋の紐の喰込んだ事を思ひ出し、彼と此とを思ひ合せて家族の人々一同にも、その尊い指端を握らせて、老婆の深ひ信仰と、難有い記念とを偲ばせ共々に感涙に咽んだことがある。

上人は極めて簡易質實な方であらせられた。そして、僞善や、虛禮やは總て好まれなかつた。生活が日々に奢侈に馳せ事柄が複雜に進んで、動ともすれば、表面をのみ飾り、外面にのみ意を用ゆる虛榮僞善の風に染み勝である現代の我々に

取つて、上人の御生涯は、眞實なる朴素なる簡易生活の模範として仰がれるのである。

上人は何事も淡白に快活であらせられた。溫い佛の親樣の懷に抱かれて、すべてのんびりとして打寛いで、執著もなく、こだはりもなく、何事もさら〳〵と打釋けて過ぎて行かれる、心廣く體胖に、不斷に法を慶んでゐられる。その輕々しい有樣は羨ましい程である。それと同時に、其の奥には極めて敬虔なる信仰が湛へられて居る、表面の安樂愉悦は、この內面の敬虔嚴肅なる泉から湧いて出るのである。紙屑一片にもお念佛の難有さを偲ばれ、ちよつと物が足に觸れたとては其の物を押し戴いて御冥加の程と喜ばれた。

上人は、かかる高德の御身であらせられつつ一面に於て、終生御自身の修養に努められた方である。この煩惱罪惡の身を攝取し救濟し給ふ絕對の御慈悲の裡に安住しつつ、毫も放縱とかやりつぱなしとか、我儘とかの有樣は見えず、念々刻々に、修養に於て向上して休み給はなかつた。老いての後にも、誰人でも、面と向つていふ事が難いなら蔭口なりと言つて、自分の惡い點を噂して貰ひたい、それを傳へ聞いて自からたしなまう程に、とさへ御述懷なされてある。

かく身を持すること嚴に在しつつ、上人は、他に對して深き深き同情の涙を湛へられた。佛慈に安らひたまへる一方に、慘らしい逆境に立れつつ、不斷に修養せられた、その深い體驗は上人に取つてあらゆる愚痴の凡情にまで分入つて、飽くまで捨てざる同情の淵源を開かれたものであらう。田舍の爺婆等が禮も無く寄せて來るのを、涙して迎へられつつ、難有い御法話に彼等の心を開かしめ、御身の座を下して彼等と同座して、一人にても多く信を取れかしと念せられる。御病氣で御口が開かれない時にも、人々の信を得られざる事を歎かれる。佛法にあだをなし、世を迷はせた者をさへ、深い同情から一切を赦してしまつて、却て、其人を化して道を慶ぶものとならしめられたのである。

それは、又同時に傳道に熱心に在した事を語るものである。悲慘なる人生の境遇と無量絶對なる救濟の慈悲力とを體認しつつ、無碍の同情に打戰げる上人の御胸は、一切の群生に向つて、此久遠の救濟解脫の德音を傳へずには居られなかつた。だから、生涯不休、百折不撓の勇猛心よりの弘化が行はれた、だから一宗中興の大業も成就された。同じ御信心の人を悉く己が兄弟と言はれつつ、一切の事物を、佛法領のものとして尊ばれた。傳道は、爰には佛慈に燃え立つ心から、一切の有緣の同胞に對する、止むに止まれぬ同情の事業であつた。この毒惡な自分をお救ひ下さる親樣を思へば、その御慈を皆人に傳へずには居られなかつた。隨つて上人は、槪念的の學問や、抽象的の理窟やに遊んで居ることは出來なかつた。そして、自己の胸奥から迸出る信仰を其の儘に、救世の實行に現はされる。此處にはすべてが此の世の事相に卽して行はれる。何事も無駄が無い、躊躇が無い、遂巡が無い、一切が其の豐富な經驗と、博大な同情とに促されて、直に、ひたひたと人の心に透込み、世間の事柄にあてはまる。實際に救世に役立つといふ力が、此處からは絕えず湧き出る。上人は實際主義の人で在したのである。

然しながら、此の事は、同時に上人の人格の中に著しい藝術的色彩の存することを拒むものではない。現代のやうに、事物の表面的、暫有的、假現的の相にのみ囚はれてゐる實際主義は極めて無趣味のものであつて、恐らく　薄い淺い功利以外に何物も認めないであらう。上人の實際主義といふのは、そんな安ぽいものではなく、事柄の奥底から湧出る深みを有してゐるのであるから、從つて、此處には、同時に深い深い藝術的感興が自然に流れ出る。世界を包む慈光にほだされまいらせて、我執から離れ、御法の美しい境にのび〳〵と安んじて在せば、此處には汲めども盡きせぬ法悅の流が一切を潤して、おのづから美の潮を湧かせるのである。美しい人格から、美しい言葉と、麗はしい文字とが生れたのである。數へ來れば、限りも無い事で、上人の性格は、かくも多方面に圓滿であり融通

無碍であり、普通人には、兼備し得ざるやうな性質をも其中に含めて居られた、從つて之を斷片的に眺めると複雜極まるもののやうである。然し、その複雜、その多方面は、すべて之を統一する一の根本點に歸着せしめられて、整然として諧調を保つて居る。何物も、彌陀の大悲矜哀の信から發してゐる。恰も春の野に薫る色樣々〳〵の燎亂たる百花が、一々皆悉く〳〵日光によつて色付けられてゐる如く八面玲瓏たる上人の性格は、すべて是れ、如來大悲の徹底せる光明に照らされ、すべて是れ、あらゆる時と處とに行き渡れる惠の雨に潤ほされて居る。此の純一無雜、淸淨無垢なる信仰に於て、上人の人格の上に現はれる一切が、其の美を示して居る。而して、此の事が其の儘に、此の『御一代記聞書』に現はれてゐる。自然に流露して輝いて居る。古今、斯の如く、その人格とその著書との間に、微妙圓滿なる諧調を示してゐるものは稀有である。此の點だけを見ても、此の書の價値の如何に大なるかが知られる。

**第四。** 斯の如きが故に、此の書が人心に與へた感化の偉大なる事は亦想見すべきである。それは、それが著はされてから爾來四百年、普く世に傳はつて、世々の民心に甚深不朽の感化を與へてゐる。其の實例は到底數へあげることは出來ぬ唯、今は、此の書が如何にして編纂せられたかといふ史實だけを述べて、其の感化の偉大なる事が、決して偶然の事ではなく、遠い流の源は深いものである事を偲ばうと思ふ。

此の書は誰人の手に成つたものか、勿論、上人御自身に著されたものではないけれど誰と明らかに定め得る證左もない。斯る貴い書の著者の名が知れないといふ事は、昔の人の無我恬淡の心胸を發露し、誠に奥床しい事である。昔から學者は種々の說を立てて、或は御弟子空善の手に成るともいひ、或は蓮悟とか實悟とかの御子樣方の手に成るともいひ、區々として一定して居らぬ。然し、此の書の書振りや組立やから考へると、是は敢て一人の手に書かれたものであるといふよ

りも、寧ろ、二三の方々の手記を集めたものであると云ふ方が事實に近いやうに思はれる。それから、又、此の書は、或る一時に、一定の計畫を立てて著されたのではなくて、折に觸れて、順序もなく記されたものが、漸く積み累つて、大きくなつたものであるやうに思はれる。

思ふに、上人の高き德、圓けき智、飽くまでも人の心に徹する深い同情に充ちた人格の偉大は、おのづから、接する人々を感化せずには居なかつた。其の中心から、如來の御慈悲に打融けた純一なる風光は、近づく者を愈〻親しく感化して止まなかつた。それで、常侍の御子達、御弟子達の心の上には、上人は恰も如來の化身であり、祖師聖人の再來であると映つてゐて、夢にまで然樣な御姿を拜した程である。されば、此の方々の身に取つては、上人の一言一行は常事ではなかつた。斯る御方の事は、自分達に取つても、今日限り忘れてしまふには餘りに勿體ないことである、而已ならず、唯自分達の間にのみ私すべき事ではなく、廣く世間の人々にも傳へて、共に其の德風に浴せしむべきである。然樣にしなければ、餘りに貴く、餘りに崇く、餘りに難有くて濟まない事である、とは彼等の胸の裡に、おのづから湧き來つた情であつた。其の上に、上人の德光が深く深く彼等を射たので、彼等はそれに動かされて、自然に此の德光を記錄せずには居られなかつたのである。斯の如き美しい動機から、三・四の弟子公達の方々が、各竊かに之を記して置いた、其の記錄が集められて此の書を成したのであらう。

是に依て吾々は、上人の人格の偉大を想像することが出來る。數多の御子達、數多の御弟子達にかくも齊しく慕はれたといふことは尋常の事でない。昔は聖德太子の深き德化は、內にしては、其の御子達を齊しく感化して、皆身命を以て其の忍辱の御敎を奉行せしめ、外にしては、天下の田夫野人にまで、其の薨去を慟哭せしめた。太子の深き遠き感化を、今この蓮師のそれに比べて共々に崇仰に堪えないことである。この感化から此の書が生れたのである。其の成立が既に斯の

如くであれば、此の書の人心に與へる感化の測り知るべからざる事も亦思ひ知られるのである。

斯く御法の中に安住したまうた崇い人格の御徳さながらの表現として、此の書は、私共を教へて下さる限り無き寶庫である。私は修養第一の書として先づ此の寶庫を推讃せずには居られぬのである。



# 聞法の用心

聞法とは法を聞くこと、卽ち、道を求めることである。道を聞くといふことは、「論語」にも『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり矣』と教へられてある通り、大切なことである。人と生れた所詮には、何はさて措き、先づ、斯の道を、教を——佛の法を聞かねばならない。是が最初の、そして、最後の一大事である。人間生存の意義は、蓋し、此の點にあるのである。

然るに、法を聞くといふことには、用心が要る、注意が要る。漫然、聞くだけでは佛法を體得することは出來ない。それで、今茲に、「蓮如上人御一代記聞書」

三百十四條の中から、是に就ての御教を拾ひ集めて伺へば、眞に、其の訓諭の懇にして、鄭寧盡さざるなきに感謝せざるを得ない。次に、類に從ふて其の五六を伺つて見たいと思ふ。

一　わかきとき、佛法はたしなめこ候、こしよれば、行歩もかなはず、ねむたくもあるなり。ただわかきとき、たしなめこ候（第六十三章）

世間普通の考では、人間並みに世の中の仕事を終つて、隱居でもした時に、始めて宗教問題の話でも伺はうなどと思つてゐる。然し、人の命は脆いもので、何時死ぬか解らぬ、そして、佛法は明日をも待たれぬ今日の事であり、又、永遠の事である。のみならず、若き時こそ身に勢あり、心に力あり、境遇も單純であつて、聞法の時緣も得易く、心を一にし、意を專にして法を聞くことが出來る。齡寄れば體も不自由になり、精神も弱くなつて、物事に集中することが出來ない。それに、境遇も漸く複雜になり、自分の事務、交際などが廣くなつて來、それによつて、心が樣々に馳せ、人格が諸方面に分裂してしまつて、到底、おちついて根氣よく聞くことは出來ないやうになる。そのうへ、若い時からなれて居ないと、齡寄つて慌てて聞いても、言葉さへしつくりとは受取られない有樣なのが多い。かくて、若き時をうかゝと過し、齡老いて聞法の時緣を待つ間に、遂に永劫の悔を殘すだらう。斯ういふ事を、彼の久しい、廣い、深い御經驗によつて感じられたであらう。上人の、『わかきとき嗜め』との御言葉は、其の奥に、惱める者にお慈悲を傳へんとの、深い深い誠と御親切とが流れてゐる。それで、次のやうにも仰せられた。

一　佛法には世間のひまを闕きて聞くべし、世間の隙をあけて法を聞くべき樣に思ふ事、淺間敷こゝなり（第百五十五章）

家の事や、世の務や、樣々の事につけて人間は忙がしいものである。忙がしく働かれる程よいのである。けれど、その忙がしさに囚はれてしまつて、遂に、聞

法の時を得られぬやうでは、人たる所詮は無ひものといはねばならぬ。忙がしい暇を割いて、つとめて法を聞くのが當然のことである。いくら忙がしいとても、聞法の時は必ず得られる筈である。隙でもあつたら聞きませうなどといふのは怠惰なる者の僞りである。勿體ない事である。迷ひ迷ひて行方を知らぬ自分を、永へにお救ひ下さらふといふ遺瀬なき御親の御苦勞に對して、かかる不心得な有様を、上人は『あさましき事なり』と歎かれた。

之に就て思出すのは、故郷盛岡の友人某君の夫人の事である。小さい洋服裁縫店を營んで居られて、お客からの註文とか、家内の用事とか始終忙がしく立働いて居られる夫人は、それでも、御法話の席には闕かさない様と力めて居られる。毎度必ず參詣して熱心に聽聞される。然様に忙がしい夫人が、如何して斯程にされるか、御法話の會が開かれる時には、豫め見積りを立てて、二三日又は數日前から用意して、毎夜とか、隔夜とかに、就床の時間を遲らせて仕事を續けられる。



そして、お客様の方の註文にも間に合せ、自分も心持よく落付て、御聽聞が出來るやうに心掛けられてである。今の御言葉を拜見する毎に、何時もこの事を想出して奥床しく思ふ。

『世間の隙を闕きて』聞くと、世間の務が忽になるからなどと辯解するのは勿體ないことである。かかる辯解をする者こそ多く務を怠り勝ちであつて、却て、世間の隙を闕きて聞法する程の者は、嚴格に務を重んずるものである。そして、聞法の爲に、闕かれた所の『世間の隙』は、決して決して廢るものではない。昔の深い信者の尊ひ心掛を偲びたい—。

一　赤尾の道宗申され候、一日の嗜には、朝つとめにかかさじと嗜むべし。一月の嗜には、近き處、御開山樣の御座候ふところへ、參るべしと嗜むべしと云々　（第四十六章）

赤尾の道宗は、蓮如上人の難有いお弟子であつて、數々の尊い行を傳へられ

てゐる。この言葉も、如何にも、彼の平生の殊勝なる心掛を示してゐるではないか。信の上のたしなみ、溫い、そして、嚴な道德である。道を求める者には、此の心掛が無くては叶はない。日にしては、朝夕御內佛にお勤めしてお禮を申しあげる。月にしては、日を定めてお寺に詣で會堂に參り、又は修養の話の集りに出て、念を入れて法を聞く、或は御開山の御命日とか、家族の誰彼の其とかには精進して道に進む。兎に角に、豫め一定の時間を見積つておいて、其の時には必ず道を聞くことに決める。自然に放任して置いては終に聞法の期なく、得道の時はないであらう。蓋し、聞法そのことが、即ち、一つの修養である、どうしても之を屢ばせねばならない。故に曰く。

一　人の心得のごほり申されけるに、我が心は、ただ籠に水を入れ候ふ樣に、佛法の御座敷にては、有りがたくも尊くも存じ候が、やがてもこの心中になされ候こと、申され候ふ所に、前々住上人仰られ候、その籠の水につけて、我が身をば法にひてて置くべきよし、仰せられ候（第八十八章）

籠といふものは、上も下も、右も左も、周圍全體が穴だらけ隙間だらけで、いくら水を注ぎ入れた所が、皆ずんずんと漏つてしまふ。法話會の席などで、法を聞いてゐる間は、難有いやうに、尊いやうに思はれもするが、やがて、會が散ずると同時に、心の隙間から折角の『御一代聞書』の御言葉が漏つていつてしまつて、門を出る頃には一法の話ではなくて世の中の噂や、子供の身の上の事でも、頭の中に詰まつてゐるのではないか、——後に其堂に來て見ると、皆さんの遺して行かれた『聞書』のお言葉が、彼方でも、此方でも、ガヤガヤ言つてる樣なことはないか。それでは、聞いた所詮も無いが、さて、如何したら宜しいか。曰く、『その籠を水につけよ』。籠の中に水を入れやうとしても、水は這入るまいが、イツソ、籠を水の中に入れて仕舞ふと、よし、籠の方で特に水を入れやうとしなくとも、必ず、水の方から籠の中に這入つて行つて、籠一杯に水が充ちてしまふ。籠の方に

強いて水を入れやうとしても駄目だが、水の方で自然に籠に這入つて來るのである。佛法の御座で得たと思つた難有さ尊さを留め保つことも出來ない程に、缺目だらけの我身なれば、その我身を佛法の水の外に置いて、外から佛法を執へ保つのではない、却て、その『我身をば法にひてて置く』のである。世間の隙を闕いて、御聽聞の席を重ねるのである、善知識に近づくのである、御同行に心を語り合ふのである、御聖教に親しむのである。平生に、常恒に「嗜む」のである、然る時に、法は忘れやうとしても忘れられなくなるであらう。難有さ尊さが漸く綿々と續くであらう、佛法の水はその水から自然と、わが身の籠に充ち滿ちて來るであらう。

かかる聞法修道は生涯のたしなみである。曰く。

一　御一流の御事、この年まで聽聞申し候うて、御言葉を承り候へごもただ心が御言葉の如くならずこ法慶申され候（第五十四章）

一　法敬坊九十まで存命さふらふ。この歳まで聽聞申し候へごも、これまでご存知たるここなし、飽足もなきここなりこ申されさふらふ（第四十八章）

修養に終期はない、これでよいと思限つてしまふ時に人は停滯する、墮落する。精神的向上は永久の進みであり、不斷の歩みであり、死に至るまでの—否、死後に亘る久遠の新生である。この前の語は、信深き法慶が、如何につつましく、終生努力向上したかを告げると共に、この後の語は、法敬坊、如何に親しく信に慶歎して居たかを告げるものである。彼に取つては、同一上人の許に、九十まで侍つてゐて、同一の事を日々耳にしつつ、而もそれが『もうこれでよい』と申されるやうな事が無かつた。いつでも〳〵、一切は初事のやうに耳に響く、同一の言葉が何年繰返されても、何時でも新に又日に新に胸に躍り立つ、久遠の生命が不斷に歡喜の聲をあげる。

是れ何の故ぞ、己を空うして教を承けるからである。この姿は次の條にも示さ

れる。曰く。

一　一つことを聞きて、いつも珍らしく、初めたるやうに信の上には有るべきなり、ただ珍らしきことを聞きたく思ふなり。一つことを幾度聽聞申すとも、珍らしく、はじめたるやうにあるべきなり。（第百三十章）

一　道宗は、ただ一つ御詞を、いつも、聽聞申すが、初めたるやうに難有由申され候

（第百三十一章）

蓋し法を聞くに當つて大切なる事は、先づ、己を空うするといふことである。己れの胸を我執の鐵鎧で被うてゐては、お慈悲の利劍も易くは之を切斷し得ぬであらう。空虚なる盃には水は入らずして他に逸し去るであらう。我が知識、我が學問、我が體力、我が德行、我が業績、我が名利、何にてもあれ、我に執じて終に我を空うせざる限り、其處には法の水の注ぎ入るべき場が無い。聞法者は我が一切を棄てて、唯信順して耳傾けねばならない。然る時に法の水は不斷に滾々として我が胸に注ぎ入り、同一の御言葉がいつも初事のやうに耳新しくきこえて、必ずや、かの耳なし雀たるの譏を免れるであらう。

一　前々住上人、おごろかす、甲斐こそなけれ、村雀耳なれぬれば、なるこにぞのる。此の歌を御引きありて折折仰せられ候、ただ人は皆耳なし雀なりと仰せられしと云云

（第百七十四章）

田に實つた穀物を啄まうとする群雀を、逐ふために鳴子をならす、初めの程は、其の音に驚き去つた群雀、何時の間にか馴れてしまつて、そのガラ〳〵響く鳴子の上に乘つて平氣でゐる。佛法のお座敷に、屢、參つて無常迅速の世の樣や。罪惡流轉の我が樣やを暴露されるに、初の程は驚きも立てやうが、我を空うせず、他事を考へて浮々と聞いてゐる間に、無常も罪惡も、尋常の事となつてしまつて驚きも立てず、我が上に注がれる廣大なるお慈悲をも、難有いとも思はずに過ごしてしまい勝ちである。これでは實に勿體ない空恐しい事である。

浮々としてゐては解らないのである。求めなければ與へられないのである。信心が得られた、お慈悲が徹した、安心が出來た、時節が到來した、宿善が開發したといふ事は、ただ不斷に求めた結果である。曰く。

一　時節到來こいふこと、用心をもして、其の上に事の出來候ふを、時節到來こはいふべし、無用心にて出來候ふを、時節到來こはいはぬ事なり。聽聞を心がけての上の宿善、無宿善こもいふ事なり。ただ信心は、聞くにきはまる事なるよし仰の由に候（第百五章）

信心は聞くにきはまる、熱心に聞けば必ず解らずにはをらない。點滴も石を穿つ。熱心に聞けば信心は必ず得られるにきまつてゐる。そこでかうもいはれて居る。

一　いかに不信なりこも、聽聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候ふ間、信を獲べきなり、只佛法は聽聞に極まるここなりこ云云（第百九十四章）

御慈悲にて候ふ間こは如何にも難有い言葉ではないか。親樣は私共を照覽して、必ず淨土に往生せしめむ、誓つて我と等しき身こならしめむこ念ぜられつつ、常に私共を愛育して下さつてゐる、私共がそれに氣付くのを久遠の昔から待ちに待ちこがれてゐられる、その大なる御慈悲がおはしますが故に、信心は得られるに定まつたものである。

一　信決定の人を見て、あの如くならではこ思へば成るぞこ仰せられ候、あの如くになりてこそこ、思ひすつるここ淺間敷ここなり。佛法には、身を捨てて、望み求むる心より、信をば得るここなりこ云云。（第百九十四章）

あのやうになつてこそこ、自暴、自棄、放縱の態度に陷るのは墮落であらう。あのやうにならではおかぬこ努力、奮勵して熱心に聽聞する所に、身を棄てて欣求、精進する所に法は得られる、そして得られた法の大さはそんな努力の比ではない。

一　法にはあらめなるがわろし。世間には、微細なるこいへごも、佛法には、微細に心をも

ち、こまかに心をはこぶべき由、仰せられ候（第百二十八章）

佛法を聞く事は忠實でなければならぬ。粗略にしてゐては叶はぬ。お師匠様の仰せ、御同行の言葉、我胸の内、行の外、一々細微に心を配つて少しも欺きごまかす點があつてはならぬ。解らぬ點は解るまで問ひ、落着かぬ點は落着くまで尋ね、忠實に工夫しつつ聞く所に法は得られる。

かく、忠實に聞く時は、誤解せずに御教をまともに受入れることが出來る。さうでないと誤解する、誤解しては一大事である。かう戒められてある—。

一　山科にて、御法談の御座候ふこと、あまりにありがたき御掟ごもなりこて、これを忘れまをしてはこ存じ、御座敷をたち、御堂へ六人より談合さふらへば、面々に聞きかへられ候。その内に、四人はちがひ候。大事のことにて候ふこ申すことなり、聞き惑ひあるものなり（第四十九章）

聞まどひは如何にして起るか、己を空しうせずに、唯、我が見に引寄せて勝手に法を聞くからである。曰く。

一　一句一言を聽聞するこも。ただ得手に法を聞くなり。ただよく聞き、心中のこほりを、同行にあひ談合すべきこことなりこ云云（第百三十七章）

我見を離れて、御師匠様の仰のままを聽聞し信順して、そのうへ、微細なる點までをも、信仰上の朋友に話合つてお互に誤解の無いようにしてゆく。かかるお師匠様は自分の生命の導者であり、かかる友達は眞實永遠の友である。人間は誰人もかかる師友を—數は少くてもよいが—必ず持ちたいものである。斯くて導かれ導きあひ、共々に道を辿るのである。

一　法慶申され候ふ。讃歎のこき、何もおなじやうに聞かで、聽聞は角をきけこ、申され候。詮ある所をきけこなり（第五十一章）

角をきけ、詮ある所をきけとは、大切な點をよく聞けといふことである。誤解の無いように、忠實に聞くと共に、殊に大切な個處に念を入れて聞く。これも御

慈悲にて候あひだ、お師匠様の仰せに順うて、漸く角も解り所詮も明らめられて來るであらう、それを逃がさぬことが肝要であらう。

然し斯る事は、心すなほにてある限り能くし得よう。すべて僞つてゐては道は辿られない。己が心中を、明らさまに、師友の前に打開いて、心直に誤を正して頂き、足ることざるを氣付かせて頂くべきである。たとひ牛盜人と言はれてもよし、佛法者と讃へられるのをば恥ぢたい。信心殊勝げに表面を飾るのは恐ろしい事である。曰く。

一　物を言へ〳〵と仰せられ候。物を申さぬ者は、おそろしきと仰せられ候。信・不信ともに、ただ物を言へと仰せられ候、物を申せば、心底も聞え、又人にも直さるるなり。ただ物を申せと仰せられ候（第八十六章）

一　日比知れるこころを善知識に逢ひて問へば、德分あること言へるが、殊勝のことばなりと、蓮如上人仰せられ候、不知處を問はば、いかほど如くにて、紛れて空しくなるべき人を、悲しく覺え候ふ由、仰せられ候（第八十一章）

一　一向に不信の由、申さるる人はよく候。言葉にて、安心のこほり申し候うて、口には同ご殊勝なることこと、有るべきと仰せられ候（第八十一章）

悲しく覺え候由とは何といふ御親切であらうか。

法を聞く者、しば〳〵、己が信・不信を問はず、己が信の誤りなきか否かを思はず、却つて他のよしあしを氣にする。聽聞の席にありながら、己を省ることをしないで、屢〻、此の話を誰某に聞かせたら其の人の何々の缺點が戒められるであらうのになどと思ふ。私は宜いのだが、あの人がわるいからなどと言つて、自分を棚に上げて他人を數化する氣である。甚しきに至ると、聞いたお話を持つて歸つて、其を楯にして家のお祖父さんお祖母さん、又は、お父さんお母さんなどを訓戒でもしようなどといふ慢心を起す、家庭の不

和がこんな處から生ずる。自分の胸がお留守になつてゐるからである、もとより、聞いた御法を家の方々の前に繰返して、お互に慶び合はせて頂くのは美しい事である。それは自分の胸に法が充ちた時、おのづから湧出てくる事で、前の態度の如きは轉倒してゐる。御誡めに曰く。

一　聽聞を申すも、大略、我がためこゝは思はず、動もすれば、法文の一つをも聞き覺えて、人に賣心あるこの、仰言にて候（第八十二章）

一　行さき向ばかり見て、足下を見ねば、履みかぶるべきなり。人のうへばかり見て、わが身の上のこゝを嗜まずば、一大事たるべきこ仰せられ候（第百九十一章）

蓋し、法を聞くことは、吾身一個の根本的要求であり、究竟的目的である。自分が救はれるか否かの問題である。修養淺き、未だ覺に遠き身を以て、他人の事を云々する暇は無い筈である。すべて、親様の御慈悲といふ事を利用せむとするのは、あさましい態度である。人にうりこころを誡められたは此の點である。そんな心にはお慈悲は聞えぬであらう。かう教へられてある—。

一　同行の前にては、喜ぶものなり。これ名聞なり。信の上は、一人居て喜ぶ法なり（第百五十四章）

一　往生は一人のしのぎなり。一人々々に佛法を信じて、後生を助かる事なり。他事のやうに思ふ事は、且は我が身を知らぬ事なりこ圓如仰せ候ひき（第百七十一章）

往生すなはち後生をたすかる事、是に心の霽れ渡つた信、これこそ聞法の用心の期する所である。法を聞くのは信を得るのである。それは、法や教やについての知識を得んがためのものでもなく、また、法や教やによつて養はれる道德を得んがためのものでもない。斯る知識も道德も、信そのものに到り、信そのものから出で來たのでなければ未だ完くはない、信そのものこそ目的其者である、究竟的、絶對的である。蓋し、宗教について、其の知識や道德やに目が着いて、信仰が其の手段となるといふのは、往生といふこと、後生を助かるのだといふことを思

はず、ただ此の世五十年間の事にのみ眼が囚はれてゐるからである、名利に味んで眞に三世の大問題を氣付かぬからである。

一　御一流の義を承りわけたる人は有れごも、聞きうる人は少なりこいへり。信を獲る機まれなりこいへる意なり　（第五十六章）

承り分けた人とは、信心を頭の中に、理窟的に作り上げたこして得意でゐる人である。聞きうる人とは、信じうる人である。是は知識から信仰に移らねばならぬといふ教である。

一　心中を改めむごまでは思ふ人はあれごも、信をごらんご思ふ人はなきなりこ仰せられ候（第百七十五章）

心の中を反省し改善しゆくのは道徳の事業である、善行をなすこか、人格を修養するこかいふのがすべてこれである。然し信を獲るのは斯の如き事以上である、道徳のため、善行のための信ではない。信は一切である。勿論、それは一切の功德の母こ仰せられてあるから、其處から德行も溢れ出るであらう、けれども、それは單に自然の結果である、信は、斯る結果を得むこの目的のために、役立たすべきやうなものではない。信は目的それ自らである。卽ち、是は道德から信仰に移らねばならぬこいふ教である。

信仰に關する知識も、信仰から出る道德も、孰れも第二義のものであつて、信仰こそ第一義諦である。吾等は順序を、又、輕重を誤つてはいけない。蓮如上人が、之を誤る者の多きを見て戒められた是等の御語には、上人の——而して其の根源には佛親の無限の慈涙が通つてゐて、讀む者をして遂に大悲に歸命せざるを得ざるに至らしめる。ありがたい事である。

以上は聞法の用心について、「蓮如上人御一代記聞書」に示されたる御教の若干を列擧したに過ぎないが。亦以て、此の書の以外の諸有問題について、此の書が如何ばかり親切鄭寧なる御教を吾等に與へ給ふかを知るのよすがともならう。

# 聖教を讀むとき

私共の修養の上に、聖教拜見の肝要なることは、屢、いへる如くである。然るに、これを拜見するに如何なる用心を要するであらうか。これに就いて、復、「蓮如上人御一代記聞書」を拜見するに、實に懇篤なる御教が示されてある。今其の三四を拾うて、手近く省みさせていただかうと思ふ。

先づ聖教　卽ち聖典と一般の書物とは、其の性質が大に異るものであることを知らねばならぬ。世に普通所謂書物なるものは目で讀むものである、然るに聖典に至つては、心で讀むべきものである。前者は私共の日常生活の便益の爲めに、何か其の時々の知識を供するものであるか、又は、其の時々の感情とか氣分とかいふものに滿足を與へるものであつて、それ以上に、私共の永久の生命の問題を解き導いてくれるものではない。物理、化學、地理、生物其の他諸の科學的知識を包める諸書も、亦、文學小說、詩歌、劇等諸の感情を取扱ふものも、概ね此の類に包まれ得る。然るに是等の諸書から得られる滿足、卽ち、其の時々の生活上の便益とか氣分の更改とかいふものだけで、私共の全人格は果して缺陷無きを得られようか、私共は能く果して滿足して行けようか。否、私共の心の奥には自分の全人格、全生命の意味が何であるか、又其の意味に對して自分の生活が如何に交涉してゐるか、是等の大なる深き疑問が横はつて居る。而して充分なる解決を要求する。此の要求は、日々の生存の便益とか、氣分の充足とかいふやうに、手輕に解決されるものではない、同時に又、永遠なる問題であり、根本的なる問題である。此が解決を得な

い限り、かの一時的方便的なる知識や感情やの充足は、眞實の意味を有しないではないか。而して此の解決に指導と光明を與へて、私共を導いて下さるものは茲に唯聖典あるのみである。聖教こそは私共の永遠の生命を託する全人格の力を與へて下さる尊嚴なるものである。

世に書物を讀むことを知る者は多い、然し聖教を讀むことを知る者は少ない。これ單に日常生活の便益や氣分に驅られて、忽忙として名利に追はれ行く者の姿であつて、而して眞實に己が事を究めざる顚倒の所爲である。是れ實に、家庭に在りて徒らに家人僕從を知れども父母を知らず、國家に在りて君王を知らざるの觀である。思ふに、現今歐米諸國の人民は稍是を知つてゐる、卽ち彼等の家庭には必ず一卷の聖書を備へ、而して朝夕是を讀誦するの習慣である。皇朝に於ても昔は是を知つてゐたのである、眞宗の家庭に在りて一家の最も尊貴き處に御內佛を安置し奉り、其處には必ず祖師蓮師の聖教を備へまつり、而して朝に夕に其の禮拜と其の奉讀とに、如來聖人の御恩の深厚なるを思ひ起させていただき、之を以て各人各家の生活の中心となしたものである。然るに近代に至つて、新しき國民は全く之を忘れ果て、徒らにかの日々の便益や氣分やを取扱ふ書物には心を馳せ身を勞することを知れども、自己と民族との永遠の生死てふ根本の問題には解決を求めやうともせず、聖教は今や顧られずして塵に埋れてゐる狀態である。これ實に己が本質の墮落である、生命の頽廢である、生命の頽廢と心傲れる顚倒の所爲である。國民精神が混沌として歸一せず、常に動搖して其の根柢を失なへるも亦必然の勢と謂ふべきである。

聖教は斯の如く私共の生命の本質的指導である。斯かる大切なる聖教を拜見するに當つては、亦大切なる用心が無くてはならぬ。次に「御一代聞書」を繙きつつ此の用心について願みさせていただかう。

聖教拜見の上には、先づ如何なる聖典を讀むべきかを選定すること、既に選定

し終りたらば是を讀むこと、是を讀みて懈らず繰返すこと、繰返して其の義趣を味ふこと、味ひて之を己が身に體驗することが必要である。卽ち「聞書」第二一五節に曰く

『蓮如上人、幼少なる者には、まづ物を讀めと仰せられ候。又其の後は、「いかに讀むとも、復せずば、詮あるべからざる由、仰せられ候。ちと物に心も付き候へば、「いかに物をよみ、聲をよく讀み知りたるとも、義理をわきまへてこそ」と仰せられ候。その後は、「いかに文釋を覺えたりとも、信が無くばいたづら事よ」と仰せられ候。

信が無くばいたづら事よ——聖典拜見の終局の目的は他にあらず、全く信心決定の一事に存する。此の一節の如きは如何にも鄭寧に盡してゐるではないか。

さて聖教の選定については「修養第一の書」に於て之を述べしが如くであるから今復た重ねて贅せぬ。

既に聖教を選定せば是を讀むことが大切である。世にツンドクといふ讀方があ



る。折角聖教を買ひ求めても、是を机上に積んで置くだけでは、徒らに塵に汚さるるのみで、勿體なき事であり、些も己が修業には資せられぬ。苟くも讀むといふ事、これ特に、學校を卒業して後に於て最も大切な事である。余は兢れの學校にあつても、卒業生に對する餞の言葉として何時も、生涯一貫して讀書せよといふ事を勸めるのが例である。學校に居る間は、多少なりとも、讀書を廢せざるものであるけれども、卒業と同時に之を廢して、唯、日常目前の事柄に追はれ勝ちにならざる者は稀である、此の事は特に婦女子の方々に於て然樣である。斯うなると、人は漸く修業から遠ざかり、自分よりも高い境界から離れ、そして、小さい自己に飽き、漸く低い世界に墮落して行く。唯、讀書によつて、特に聖教の拜見によつて、動もすれば墮落して懈怠になり易き心に鞭うつて能く向上し、自分の人格を修養し、漸く高い理想の境界に進み行き得るのである。曰く

『よろづ御迷惑にて、油を召され候はんにも、御用脚なく、やうやう京の黒木を、少しづつ

御こり候うて、聖教なご御覧候ふ由に候。又少々は、月の光にても聖教をあそばされ候』云云（第百四十五節）

月の光にて聖教を御覧なされた心掛に比べて、私共は恥しからざるやう熱心に讀むべきである。書も多く求め易く、すべて聖教拜見の便益については、上人の時代とは比べ得ぬ程に容易になつてゐる。餘り便益すぎるので、古人の苦心を忘れ、自ら懈怠に流れることは申譯のない事である。

讀むについて大切なのは繰返す事である。唯々根氣よく繰返すといふ事、これ實に修養上最大切なることである。讀書百遍意義自ら通ずと言はれて居る。解つても解らなくても唯繰返し〳〵拜讀するがよい、解決はやがて必ず與へられる時が來る。曰く

一、……聖教は讀やぶれ」と……（第五節）

一、聖教を拜見申すも、うか〳〵と拜み申すは、その詮なし。蓮如上人は、「ただ聖教を

ば、繰れ〳〵と仰せられ候。又「百遍これをみれば、義理おのづから得る」と申す事もあれば、心を留むべきことなり……』（第八十九節）

而して上人は、眞に是等の御言葉の實行者で在しました。曰く

一、前々住上人、仰せられ候、安心決定鈔のこと、四十餘年が間、御覽候へども、御覽じ飽かぬと仰せられ候。又金を掘り出す樣なる聖教なりと仰せられ候』（第二百四十九節）

是等は、かの孔子が易を讀みて、韋篇三絕せられたのにも思ひ合せられて、尊き事に覺えられる。上人既に斯の如くにして在したるが故に、此の感化は諸弟子の中にも顯はれて、彼等も亦上人と共に、聖教を繰返し繰返し拜讀する人となつたのである。曰く

一、金森の善從に、或人申され候。此間さこそ徒然に御入候ひつらんと申しければ、善從申され候、我が身は、八十にあまるまで、徒然と云ふことを知らず。その故は、彌陀の御恩の難有きほどを存じ、和讃・聖教等を拜見申し候へば、心面白くも又たうときこと充滿する故

に徒然なることも更に無く候こと、申され候由に候（第百九十七節）

聖教の中に、心おもしろくも亦たうとき事が充ち滿てあるが故に、之を拜見して日を暮し月を送り、かくて老の將に至らんとするを忘れて樂んでゐる、この安祥なる生活は亦床しくも尊いものではないか。

次に聖教を繰返し拜見するに當つて、よく〳〵其の意味義趣を考ふる事が大切である。此の事は繰返し拜見してゐるうちに、自然と其の教への意味、其の言葉の義趣を思ひ索ね、問ひ答へするやうになる。然るに、茲に注意すべき事は、聖教は決して〳〵自己の意に任せ思付に依つて之を解釋してはならぬといふ事である。聖教の文字は、或は寛容にして悠揚であり、或は嚴肅にして一語も忽には置かれてない。そして、それは、是を語り是を記したまへる人格の——高い境界に到りたまうた人格の、自然の發露なのである。抑、普通一般の事柄さへ、修養未だ淺くして其の境に到らざる者には、其の境の表現をば理解することが出來ない。

目以て文字をば見得るけれども、その文字の奥に潛める精神、本質をば容易に見ることが出來ない、そして強ひて之を見んとする時は、忽ち邪見に馳せ、妄想に囚はれ、自己の淺はかなる我見によつて、聖き尊き内容を解し誤り、以て自を誤り他を損ふことがある。此の徒を稱して則ち增上慢の輩といひ、獅子身中の蟲といふ。道を求め教を仰ぐ態度は謙遜でなければならぬ。自心、内に空虚にして、始めて能く高き者の注げる水を受入れることが出來る。されば聖教の拜見に際しては、一句一字をも苟もせず、よく〳〵誤解せざるやう懇に師友の示教を仰ぎつつ、己が過誤を正し、以て正しき道に迷はぬことが肝要である。曰く

一、……聖教は句面の如く心得べし、其の上にて、師傳・口業はあるべきなり。私にして、會釋することなかるべからざる事なり（第八十九節）

さて此の如くして聖教を拜見するに、其の期する所の終局目的は、理想の體驗に存する、卽ち、信心の決定に存する。如何に聖教を拜見し口之を誦し、心に之

暗んじて、千言萬語に及ぶとも、此の唯一念の信心が決定しないならば、其の人は眞に聖教を讀める者とは言ひ得ない。曰く

一、聖教をよく憶えたりとも、他力の安心を、しかと決定なくば徒事なり』云々（第十一節）

是を以て、聖教を拜見する者は、決して、所謂聖教讀みを以て終つてはならぬ、必ず之を色讀し、體達するの境地にまで到らねばならぬ。然らざれば、如何に聖教を拜見すとも、遂に其の所詮は無き事となる。之に就きて、世に所謂『論語讀みの論語知らず』といふ諺があつて、斯る意味を巧みに道破してゐるが、上人も亦同樣なる御言葉を發したまうた。曰く

一、蓮如上人仰せられ候。聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり。一文字も知らねごも、人に聖教をよませ、聽聞させて、信をとらするは、聖教よまずの聖教よみなり。聖教をばよめごも、眞實によみもせず、法義も無きは、聖教よみの聖教よまずなり、と仰せられ候』（第九十四節）

是れ卽ち、聖教讀まずの一文不知の者と雖、眞の信仰ある者は、眞の意味の聖教讀みであることを示されたのである。徒らに千卷萬卷の經を誦すとも、もし信なくば、その誦したること其の事が、却つて、禍を成して學に傲る增上の輩ともなるであらう、恐るべく愼むべきことである。而して、かかる意味にて聖教讀みの聖教よまずには皆人の屢陷り勝ちなる事である。之に反して、聖教よまずの聖教よみとなることは、眞に稀有なる人格——人中の妙好人となることである。安國淡老は、何時もこの御言葉を引いて、私共を警められたことである。其の次の節にも左の御教がある。

聖教よみの佛法を申したてたる事はなく候。尼入道のたぐひの、たふとやありがたやと申され候ふを聞きては、人が信をとると、前々住上人仰せられ候由に候……

（第九十五節）

たとひ如何ほど、萬卷の經に通ずとも、己が知識にて往生することは出來ない、

信心決定の一大事は、唯如來の廻向し給ふ他力によるのみ、これを以て學者は己が知識を無にして、一文不知の尼入道の身と同じて法を聞かねばならぬ、謙虚なる谷にのみ法水は流れ注がれるであらう。

之を要するに、聖教拜見の眼目は、其の目的としては信仰の體驗に存し、其の日常の心得としては繰返して一定の聖教を拜見することに存する。

# 聖道と淨土

## 個性の力と境遇の力

吾人の個性に力を認めるか、吾人の周圍なる境遇に力を認めるかによりて、聖道と淨土との區別が出來る。と見られるといふのは、いづれも共に一定の理想に向つて進むとしても、個性に絶對の能力を認めて、周圍から押寄せる種々の壓迫に打ち克つといふ確信からも、亦修養によつて夫等を克服し得るといふ可能性からしても、自己の力を強く認め、斯く力を確信した個性の上に理想を體現しようと

するのが聖道門式の生活である。然るに之とは全く正反對に、同じく一定の理想に向ふとしても、實際問題から出發して、自分に加はる壓迫、周圍の影響を充分認め、極端に言へば、己れの個性と考ふるものを分析すればする程、悉く境遇の積集に過ぎないと思ふ程に、周圍の力を強く認め、斯くて境遇一變といふ考から周圍の改革より進んで、自然に個性の革新を遂げやうとする態度が往生淨土門の生活型である。この二つの生活型式は、敎育であらうが政治であらうが、乃至道德信仰等の總べての方面にあつて、各々特色を發揮するもののやうに思ふ。



## 聖者の宗敎と凡人の宗敎

聖道・淨土といふ本來の語は唐の道綽禪師といふ方が、其の著安樂集の上に於て初めて用ひられた宗敎分類を示す學語であるが、其の後廣く用ひられるやうになり、今日では佛敎界全體に何人でも口にする程の通俗的用語となつたのである。

それで聖道とは聖者の宗敎といふことである。此の立場から言へば聖道門に對する淨土門とは、凡人の宗敎といふことになるであらう。又普通淨土門と言つてゐるのは詳しく言へば、往生淨土門といふべきであつて、其往生淨土門とは、現在の境遇を一變して一層良好なる、或は絕對に良好なる境遇に身を處するといふ意味であつて卽ち次の生活或は次の生活以後にありて成佛するを理想としてゐる宗敎である。此意味からすれば、聖道門は境遇は兎に角として、現在の生活に於て直に成佛を期することを理想とする宗敎である。故に聖道門と淨土門とは現身成佛の宗敎と次生成佛の宗敎とも、或は又聖者の宗敎と凡人の宗敎とに區別し得るのである。そこで聖者はあらゆる周圍境遇に打克ち得る偉大の能力を自己の上に認めて、其處に聖道門の宗敎を見出し、凡人は境遇の力を認めて、先づ其の境遇の改善から着手しようとする立場から、淨土門の宗敎を見出し來るやうな譯である。

## 淨土門中聖道門多し

今日淨土門に屬する宗派としては、現はれた上に於ては先づ眞宗、淨土宗、融通念佛宗、時宗等であり、其他は悉く聖道門の宗派と考へられてゐる。普通の形式の上からはそれで間違ないが、併し其の信仰の內容に立入つて調べて見ると、意外にも聖道門といはれてゐる人の中にも多數の淨土門的信仰に立つ人もあり、又反對に淨土門といふ人の中にも、聖道門的信仰に立つ人が多數にあるのである。今聖道門の側は暫く別として、先づ淨土門の中で、自己の力は弱いものであるといふことを認めてゐる人であるならば、皆悉く淨土門の系統に屬する人といへるのであるが、併し同じく自己の無力を認めたといふても、それは唯だ口舌や筆先の上で弱いので、實際の心理狀態や日常行爲は、案外強い名利心や我慢心に立つて活動してゐる人が少くない。斯様な人は口に念佛を唱へ、心に他力の信仰に安住したと思ひながら、實は大膽な聖道門的信仰に立脚してゐるのである。卽ち口先だけでの凡夫、筆先だけでの淨土門であつて、事實は丸で反對の聖者であり、聖道門の人となつてゐるのが非常に多い。之を信仰の內容に立入つて深刻に吟味して見れば、道德とか藝術とか乃至は哲學理智などにひどく執着してゐて、赤裸裸に自分を佛の前に投げ出し得ない間は、絕對に他力に入つたのではない。卽ち所謂久遠劫來の定散自力が勢を逞しうしてゐる學者の心振と毫も違つてゐないのであつて、彼の聖道門系統に屬する。

自己の力を全然棄て、眞赤裸々のままの自分を佛に投出した時、初めて眞の淨土門式生活に入つたのであり、又凡人としての宗教を味ひ得る資格の付いたのである。然らざる限りは如何に淨土門と云ふたとて、決して智者善人といふ立場を離れることは出來ない。彼の御和讃に

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども、自力かなはで流轉せり

とある如く、今日までの永い間迷ふて來た通りに、これから後も久しく迷はねばならぬ、といふ淺猿ゐ境地を到底脫落し得ないのである。されば聖道とか淨土とか云ふても、單に宗派の色彩を分つものとして考へたり、或は單なる冷かなる學語と思つたりしないで、自分の信仰を批判するところの嚴肅な敎語として玩味したいものである。

## 往生淨土の二つの見方

往生淨土といふ思想について、往生淨土を手段として別に理想を認める考と、往生淨土を手段とするのでなく、直ちに終局の理想と見てそれに絕對の價値を認める考との二通りの見方がある。

これは親鸞聖人の淨土敎と、それ以外の淨土敎とを區別せしむるものであるが、現代の靑年或は思想家と稱する者には、動もすれば、往生淨土を一方便と考へて、それを越えて更に別にある理想を豫想するものが少くない。これ淨土を方便として成佛を別に見る聖道門的信仰と撰を一にする思想で、名は淨土といふも實は聖道に外ならない。又近來淨土門の信仰家の多數は、往生淨土の往生を極めて現實的に解釋し、往生と成佛とを同じものに解釋しやうとする傾向が强い。

往生を信仰によつて生きるのであると成佛とは決して同じ意味ではない。これを混同してしまふのは前の現身成佛の思想と共に、名は淨土門であつても實は聖道門である。兎に角、聖道、淨土といふ語が廣く人々に膾炙するに從つて、益その明瞭なる區別を沒し、知らず識らず口の淨土門で、心の聖道門が多くなることは大に注意せねばならぬ。

# 二重の人生觀

宗教的自覺とは、絶對の或るものに安住することで、それも偶然ではなくして努力精進の結果であるべきである。

佛教の自力他力とは、此のあるものに安住する方法を兩面から示したものに過ぎない。誰れでも各自に至誠から求めなければ、決してこのあるものに安住することは出來ない。富貴や權勢や學問やを持つて向つても、また端坐正念、念佛誦經して修行しても、至誠の要求が心中に起らなかつたならば、或るものに安住し、之を攫み得ることは出來ないのである。其の至誠の要求とは、微塵も虛僞がなくして、如實の至誠に基いた要求である。

其處に或物は意識されて來る筈である。言換へれば天眞裸々の赤兒となりて、此の或物を攫んで我物とせねばならぬ。一度我々が之を攫んで我物とすれば、衣食住の現生活を以て人生と觀じて居る其の下に、更に堅固な安心な高遠なる今一重の人生を觀ずるやうになつて來る。二重の人生觀とは卽ち此の謂ひである。

宗教の立場は、我々の日常經驗して居るもの以外に、別に一種の人生を觀じて居る。一般の人の經驗せる人生は、一重の人生であつて、悲しきに泣き嬉しきに喜び、生れる、老いる、病氣する、死ぬる所の人生であるが、宗教に入つてからの人生は、此の一重の人生の外か內か、表か裏かに今一重の人生があるのである。名家が積日苦心して作り上げた立派な繪畫や彫刻に向つたときに、其の美に打たれ、恍惚として現實を忘れ、無何有の境に入ることがある。之を學者は名けて美の想界卽藝術の別天地と云つて居るが、今此に宗教眼が開けて宗教の別天地に遊

んで、呼吸する靈妙の空氣に爽快を感ずるのを名けて、宗教の人生といふのである。昔釋尊御在世の時、弟子の舍利弗が螺髻梵士と人生の解釋を爭ふたことがある。舍利弗は此の世界を荆棘瓦礫の穢土といひ、梵士は七寶莊嚴の淨刹と稱へ、いつまで論じても決しないので、遂に其の解釋を釋尊に求めた。其の時、釋尊は一言の御答もなされずして、チヨット足指を地に按じたまふた、すると此の世界は忽ち七寶莊嚴の淨刹と變じた。之を見た舍利弗は我が見解の誤れるを恥ぢて梵士に服した。話は簡單であるが、明かに人生の二重觀を敎へてゐる。

釋尊出世の本懷とも云はれて居る有名な法華經は、王舍城の東北隅、靈鷲山といふ山で說かせられた。靈鷲山といへば如何にも秀麗なる高山のやうに聞えるが、今日往つて見れば實に驚くではないか、其の有名なる山は高さが僅かに四五百尺、併かも瓦礫ころがり、荆棘はびこつたるみすぼらしい一小丘に過ぎないのである。此所が其の昔釋尊が無量義處三昧と言ふ定に入り、法華の會座を開かせられた靈跡とは、いかにも想像が出來ないのである。其は一には、風雨多年の浸蝕が斯くもあさましく廋せ果てた山骨を露出させたのでもあらうが、何しろ大寶積經等に此の山を讃頌し奉るのに、あらゆる莊重なる形容詞を竝べ盡して、此の天地法界の內外に二つとはない立派な山であると書いてあるのを拜讀したる余は、奇異の感に打たれざるを得なかつたのであるが、能く考へて見れば、之れが其の二重の人生觀中の一面を說明したものなることが知れる。法華經の壽量品に、釋尊が。

「聽衆は凡眼で見るから此の山をつまらぬ山こ見れごも、我法華經の信仰の眼で見るごきは、金、銀、瑠璃、玻瓈、珅璖等の七寶で莊嚴された立派な山こ見える。又この山は今說法の時ばかりでなく、未來永劫の末までも、天人常に充滿して法味を愛樂する樂園である。我れは死するここなく、常に此の山に在りて說法すれば、大衆も永遠に此の山に住して法味を樂を享くるであらう。此所は荆棘瓦礫の穢土ではなくて、常寂光の淨刹である」

と說かれてあるが、是れ卽ち釋尊が御實驗なされた二重の人生觀であるのである。之れは古き經文上に表れた說法であるが、此樣な事實は擧げ來れば幾何でもある。

一寸聞くと、ホンの傳說的な神祕に過ぎない樣に聞く人もあらうが、決してさうでない證據には、釋尊御一生の傳そのものが、確實に之を證明して居る。我等の立つて居る人生已上、又已外に、モットたしかな、堅固な、言換へれば高遠靈妙な人生に、立つて居られないならば解釋の出來ぬことになつて居る。近い話は親鸞聖人が越後左遷の折に言はれた。

我若し配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是尙ほ師敎の恩致なり。

の言葉でも、其の內面には實に幽妙なものが潛んで居る。若し立場が高遠な人生でなかつたなら、彼の言葉の流露した祕密が解釋されないと思ふ。

法然上人が識德雙び高き方ながら『愚痴の法然房』と言ひづめにして、溫かき感化を布かれた事蹟でも同じ事である。佛敎諸宗の祖師先德、近くは我等が親しい友人の內でも、此の普通人生已外に、別に宗敎の敎ゆる高遠な人生に立つて居る人々から、我等の實際に學得し得る道德的の神祕は澤山ある。たしかに之は道德の人の宗敎的訓練の結果から、已外に其の困難を切り拔けて成功して居る。如何にして斯くなつたかと問へば全く佛祖の賜だと答へる。其が佛祖の立たれて居る人生に、同居して居るから來た結果であることは明かである。其所に道德や法律を超えて、併かも其を內容として居る。換言すれば、此の現實の人生を超えて、併かも夫を內容とし實質として居る高遠な人生がある事が信ぜられる。

# 知恩報恩

## 日本道義の根柢

廣くは世界人類、近くは古來の東洋人とりわけ私共日本民族の心を、何時の世にも、力強く支配して居た所の恩といふ感じに就いて、自分の考をあらましの述べて見やうと思ふ。其について先づ心に浮ぶのは、今日の私共お互には、此の感じが餘程薄らいで來て、多くの人々の中には、この恩といふ語を耳にしても、別に深い意味強い響を感ずるものは少ない、のみならず、甚しきは、之に對して一



種の反感侮蔑の念を懷く者さへある樣になつたことである。併しながら、顧みれば私共の父母、祖父母、曾父母、溯つて私共の祖先、廣く吾日本民族、否、日本ばかりでなく、少くとも東洋民族の間には、古來この感じは非常に敦かつたもので、恩とさえいへば彼等は之に對して、直に、何となく大きい深い、そしてゆかしい溫い直感を惹き起すと共に、一種嚴肅なる、責任意識を持つたもののやうである。

昔は斯くも人心を支配した恩といふ感じも現代の人に對しては、斯くの如く薄弱になつて來たといふことは、種々の原因に因ることであらうが、今は其詮議は暫く止めて、一體私共の祖先日本民族の間に、云はば道德的若くは進んで宗教的道念ともいふべきほどに力のあつた、この恩といふ意識が、今日の私共に果して緣の遠い事であらうか、無關係のものであらうか。少くとも、私共が、これは今日かようにに輕く取扱つて、顧みないで置くほどに、意味のないものであらうか、

少しく考を深くすれば、其の奥には容易ならぬ根柢があつて、今日の私共に、深大の關係を有して居る事を見出さるるではあるまいか、是等の點について大體私の考を述べて、各位の參考にして戴きたいのである。

## 恩といふ語

一體、此の『御恩』といふ語は、西洋には見當らない言葉であるかと思はれる。勿論、一應似寄つた言葉はある、卽ち英語の「フェーヴォア」Favour,「グレース」Grace,「カインドネス」Kindness,「ブレッシング」Blessing 等は、之に似通つた意味をもつて居るけれども、何れについて考へても、私共の祖先の間に味はれた恩といふ意識を言顯はすに適當な言葉とは思はれない。何處と押へて相違を揚げるのも六ケ敷いが、唯、何となく物足らぬ、何だか奥行が足らぬ、廣さが足らぬ樣な氣がする。成程、神の惠み (God bless) といへば非常に大きい感じがするけれども、其の言葉から直に、吾等祖先の所謂恩といふ感じの全體を味ふことは出來ぬ。專門の學者に匡して見るに、獨り英語ばかりではない、他の佛蘭西にも、獨逸にも又遡つて希臘・羅甸の字書からもこれに適當な語を見出すことは困難といふことである。之を要するに、恩といふ言葉に相當する語は西洋には見出されない。從て西洋の人達には恩の意味が完全に理解し得られない、よし解釋はされても、到底實感的に味はれることは六ケ敷い。譬へば、日本固有の藝術趣味の如き、歐米の人達に於て、徹底した感じを持ち難いやうに歐米人にとりては、恩の語の持つ全體の感じを、完全に理解することは何うしても困難とするところである。東洋に於ても、恩の語を解して、甲より乙に對する恩惠卽ち「メグミ」の義であるといつた樣に、其の字義を解することは容易であるが、古來私共の祖先が、道德的及宗敎的中心意識として、實驗し來つた全體としての恩の感じを、適當な言葉で說明

して欲しいと求める人があつても、如何なる學者もその說明には、一寸躊躇せざるを得ない程にこの語は特殊の意義を含んで居る。

## 恩の教へと佛教

東洋にありても、この言葉は神道には勿論ない、儒教には多少の關係はあるけれども、多く關はるところは無い、論語のうちに、恩と云ふ語の甚稀に存するのでも分るであらう。然るに佛教に至りては殆ど專門的に之を教へて居る。卽ち支那三國時代に翻譯された大無量壽經や、西晋時代に傳へられた法華經やに、この語が盛に用ゐられてあるが、之に由來して、支那・日本の人々は、恩といふ語と共に、その奥深い意義をば佛教から教へられたと見て差支あるまいと思ふ。

斯の如く、恩といふ語は說明は六ケ敷いのであるが、而も、此の六ケ敷い語が、東洋人特に日本の私共祖先の間には、何等の說明を要せずに、直感的に此の語の眞意が了解されたのである。『恩とは何ぞや』『恩とは恩なり』唯斯くの如くして十分判つて居つたものである。親の恩、師匠の恩、帝王の恩、佛の恩、是等に對しては、上下共に一點の疑を容れなかつた、何等の說明を要しなかつた。まことにこの語は一切の說明を超越した特殊の意識を現はすものとして、而も自由に使用され、實感されたものであつた。恩の語に說明を要する様な時代は、取りも直さず、恩の衰へた時代である。今の人々は何事も懷疑の目を以て見る様になつて、昔日本民族の間に遍く認められてゐた、此恩といふ事さへ、一體、どういふ事であらうといふ様に、疑を容れる様になつた。これを要するに、恩といふ事は、語そのものが東洋獨得であつた様に、其の感じも亦東洋民族の有した獨得の意識であつて、而も直覺的に實感し得るもので、到底之れに定義や解釋を下す事の出來ぬ意識であつたといつて差支なからうかと思ふのである。

## 恩は直感的なり

そこで、一歩進んで、この恩の感じの内容を考へて見るに、先にもいふ如く、恩意識は第一に直感的のものであると云ふことに注意すべきである。恩とたつた一言いへば夫れでわかる、之に説明を下し、理窟で説かうとしても無益である。之に就て感ずるのは、近來この恩思想の衰頽を憂へて、一部の爲政者、學者、實業者、教育者の方々は、何とか之を挽回せねばならぬといふので、熱心に色々に手を盡して居らるる。夫れは甚結構なことで、是非さう無くてはならぬ事ではあるが、唯其の手段として稍もすれば、種々の理論を附加へる傾向のあるのは、些遺憾とする所である。喩へば、親の恩を感じさせんが爲に、親は箇様斯々として子供の爲を計つて居るではないか、子たる者も、亦親の恩を思ふて之に報ひ



ねばならぬ。國王は人民の爲に斯々の骨を折つて居られる、斯々の便利を與へて居られる、國民も亦君恩を奉戴せねばならぬといふ風に、一々理窟を立てて感恩の念を強ゐんとして居る傾きが見える。併し、これは餘程考へものではなからうか。人間の實行問題は理窟を以て強ゆる事が出來やうかどうだらうか、のみならず、一つの理窟には同時に反面の理窟が伴ふ、子は親に孝行せねばならぬと理窟をいふ、一方からは、必ずしも孝行するに及ばぬといふ理窟もいへばいはれる、國恩、師恩皆同樣である。

某博士は地方教育家に答へんために、日本の國體を次の如く説明されたことがある。一體世の中は違つたものが數多あるので、それが入混つて互に競爭する、其處に興味もあれば進歩もある。露西亞・英吉利・佛蘭西・獨逸・亞米利加といふ樣に、各々國體を別にし歴史を異にし、種族を異にした樣々の國家が、方々に割據して萬事に競爭をやる。其所に全體としての人文の進歩が起る。而して此の競爭を

なすには、各其の國の中心が必要である。此の中心が亦各異ふ、異ふ所が亦面白い、亞米利加は大統領、佛蘭西も大統領、英吉利は帝王を戴いて國を建てて居る、吾日本も又古來の國體として上に陛下を戴いて居る。斯くして競爭も出來、從つて進歩發展も起る、だから世界人類全體の進歩の上より考へても、吾々は日本の國體を維持すべきである。だから、陛下に忠でなければならぬ。そこに國家主義と世界主義との調和もあると、斯ふいふて居られる。無論、一應は其の通りで尤の說ではあるが、矢張り、理窟に墮ちたものであつて、どうしても半面の眞理に値するに過ぎない。少くとも、之れでは人々に何等の力を與へない。成程、帝國主義の必用は夫で分つた、而し、夫れは他國の共和政や、聯邦政と同程度に於ける必要である。陛下は有難い、忠を盡さねばならぬといふことは分つた、而し夫れは、他の大統領と同じ程の難有さである、從つて、盡す忠義にも變りがない。實は露西亞でも、亞米利加でも、何處でもよいのだが、幸か不幸か、偶然、日本に生れ合せたから、先以て、陛下に服するのである。そして、必要によつては、之が共和政になつても、何に變つてもかまはぬといふ冷かな半面の理窟の裡に伴つて居りはせぬか。少くとも、日本人が、陛下の御名を耳にしたばかりでも、何とは知らず敬慕の念に打たれて、心自ら改まるといふ樣な心持は、とても、こんな理窟では解釋することは出來ぬ。

此の外、或は日本の國體が家族制度に基いてゐるといふ考から親を大切にし、祖先を尊ぶといふ事は、歷史的に日本道德の特徵として誇るべき所である、だから飽迄孝行であらねばならぬといふ樣な聲も聞えるが、實は、こんな理窟で納得して、夫れで御恩といふ感じが恢復さるる位ならば、初めから、今日の如き衰頽を招かなかつたであらう。理窟と膏藥は何處にでもつくといふが、畢竟、理窟では駄目である。理窟でいへば、一つのものを善ともいへる、また、惡ともいへる同じ所を西ともいへる又東とも見られる。一方から、斯ういふ理窟があるから、

斯うせねばならぬと強ゐる、他方からは、斯ういふ譯だから斯んな事をするに及ばぬともいへる。特に恩といふ感じの如きは、之を説明しやうとしても、到底、口や言葉で説明し得る様な淺薄なものではない。先にもいふ如く、日本民族に在つて此の意識は、私共の父祖の間には、實に直覺的に了解されて居つた敬虔の意識である。昔、西行法師が伊勢の大廟に參詣して、其の神寂びた社前に跽いたとき、吾知らず、『何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる』と詠じたと傳へられて居るが、實に夫れである。私共、陛下の行幸を拜し奉るとき、縱令、鳳輩深くして龍顏を拜し奉る事が出來なくとも、何事のおはしますかは知らず、唯、忝ない、難有い、尊い、親はしい、何といはうか、是等の意味の總てを含むだいふべからざる感に打たれる。斯ふいふ感じは何處から起つた、なぜ起つた、どんな心理的要素があるか、などと無理に説明を下しても、決して滿足な解釋のつくものではない。理窟や解釋を超越した厭くまで直覺的に人の胸奥に實感さるべき一個獨得の感じである。

## 超打算の恩意識

次に恩といふ意識には打算的の考が含まれて居ないといふことである。形にあらはれた恩惠には、種々の差があつても、之を受ける人の恩を感ずる心持には何等淺深大小の區別はない、打算數量を全く離れて無制限に唯もう有難いと感ずる。其所を、卽ち、恩意識は數量を離れて居るといふのである。

一體、西洋の思想や、近頃、日本にも一般に行はれて來た所の所謂現代的の道德思想といふものには、人間の本務といふ事を説く下から、同時に、直に之れに對する報酬といふ事を言ふ。義務といふことを敎へる下から權利といふものを豫期させる。自分は斯うしてやつた、だから彼は斯ふすべきだ、自分は彼の人から

斯の程度の恩を受けた、だから自分は之れ位の禮をすれば濟むであらう、あれ丈けの勤務に對しては是れ位の報酬は當然だ、といふ樣に單に職業や事務ばかりでなく、道義的にも宗教的にも、凡そ、人間相互の行爲が、悉く計算的になつて居て、夫が當り前の樣に思はれて來た。然しながら、もし人がかういふ考を根柢にしておいては、到底、永久に不平の絶える時があるまい。喩へば、玆に主人と雇人とがある、兩方ともに人間である以上、慾には限りがない、主人はこれ丈けの手當に對しては、彼れは、どうも働きが足らぬといふ。雇人は、己れは此の樣に働くのに餘りに報酬が少いといふ。よし一旦主人の方が讓つて、手當を增加してやつたにしても、其當座こそ、難有がるであらうが、間もなく、又同じ不平が必ず起る。主人も勿論 益〻不足を感ずるであらう、もと〳〵慾ざ慾との衝突である から、限りなく繰り返される。近年西洋にも日本にも、種々の會社や製造所に「ストライキ」といふものが頻繁に起るのは、畢竟、この打算的觀念の現はれであらうと思ふ。一體、理窟から考へても、之れは實に己れ自身を見縊つた意氣地のない話であつて、立派な人間一人が、永い間、鍛へあげた尊い此の身體や精神を使つて、さうして自分から、自分に小さい値をつけて、之は二圓が相當だの、之は三圓の値だのと人間に代價の符徽をつける。先方もまた、夫を高いの安いのと算盤を以て打算する、實に愚な話であるが、之れが今日の世の有樣である。斯の如くにして止る所がなかつたなら、世の中は總て算盤づくとなつて、實に無味乾燥のものに變るであらう。否、夫ればかりか、到る所、不平不滿の空氣に滿ちて、喧嘩「ストライキ」が所在に起り、世は慘憺たるものと化するのであらう。私は此の弊も、計算を超越した恩意識の溫味によりて救はれたいものであると希望するのである。

## 恩といふ心持

恩といふ心持は、數量や計算やを超越して居る。「自分が今日安らかに世を送る事の出來るのも、人間らしい御勤めの出來るのも、全く主人の御恩である、勤めねばならぬ、勵まねばならぬ」之が恩の感じを有する雇人の心持である。「會社の盛大になつたのは、決して自分一個の力ではない、皆が汗や膏で働いてくれる御蔭である、酷く取扱つてはならぬ、親切にせねばならぬ」之が恩の感じのある主人の心持である。其所に恩の感じさへあれば、痛ましい打算づくの爭が止んで、而も、總ての事務が圓滿に進捗して行くであらう。家庭に在つての親と子、地方に在つての地主と小作人、教育上の教員と學生、官署に在つての官吏と人民、何の方面を考へてみても同樣に言はれるのである。

親の恩、友人の恩、師匠の恩、天子の恩、其他、すべて恩を蒙つたといふ意識には唯難有い、お蔭樣でといふ無制限の感謝が起るばかり、其所に何の計算を容るべき餘地もない。百圓の金がいる、手許に五十圓あるがもう半分なくては間にあはぬ、どうしやうと困つて居るとき、隣りの友人が五十圓は私が出そうと云つて持つて來て呉れた。此時の其人の感じはどうであらう。百圓のうち、五十圓借りたのだ、皆借りたのならこれだけ頭を下げるのだか、半分だから、半分丈け禮をいはう、といふやうな、そんな計算的の感じがどうして浮ばう。唯萬事を忘れて難有い、忝いと思ふ外何の餘念もあるまい。此の時の心持が卽ち恩の計量を離れた味である。唐の魏徵といふ宰相が歌ふた詩の中に、「人生意氣に感ず、功名何ぞ論ずるに足らん」といつた句があるが、實に面白い語であつて。恩意識の特徵を發揮して居る、太宗皇帝が自分を信任して下さる所の其の意氣に感じて見ると、名譽も利益もない、あなたの爲には、水火の中をも決して厭ひませぬ。といふ意を歌つたものであつて、誠に恩意識の數量を離れて居る心持を、實に、鮮かに示

共に道を求めて
して居るのである。

## 恩意識は廣大なり

第三に、恩の感じは頗る廣い意味を持つて居る、世には己はあの人には恩があるが、此の人には恩がないといふ様な事をいふ人のあるのをよく聞くが、修養ある人が心に懐いて居られた恩といふ意味は、斯んな狹い、個人間にのみ限られたものではない、人間は愚か、動物にも、山にも川にも、乃至天地のあらゆるものに對しても遍く行き渡つて感せられた、頗る廣大なものであつた。

一體、一通りの道理から考へて見ても、私共が、他の一般の人々から受けて居る恩惠はいふまでもないことであつて、今日、自分が茲に生存して居るといふ事實は決して單獨に出來得た話ではない。周圍の親戚、友人、知己、溯れは父母、



祖先の恩惠にあるばかりではない。種々の關係から關係を推して行くならば、直接間接の差はあつても、知ると知らぬとに論なく、今日唯今、茲に斯うして、自分一人が生きてゐる爲には、廣く世界人類の全體、遠く古からの人類の祖先、すべての骨折の結果である。斯様な深く親しい關係のある人類であることを思つて、其處に限りない御恩が自分一人の上にも注がれてゐる事に氣付けば、世間に黄禍であるの、白禍であるのと、少しばかりの皮膚の色相に拘泥して、他の人種を排斥するが如き考の起るべき筈はないのである。

恩意識は斯の如く人類全般についていふばかりではない、牛や馬や、鳥や魚の如き動物に對して亦同じく恩義を感じて居るのである。爰にも、西洋と東洋との思想に違ひがあつて、西洋では、世界の始めに神は人間の爲に、牛や馬や草や木を造つて呉れたといふ考が根柢になつて居る。だから、牛を殺し馬を屠つても構はぬ、それは神の許た所であるといふ考が知らず〳〵表はれて居る。之に反して、

東洋では、儒教ですら、君子庖厨を遠ざくとかいつて居る。牛でも馬でも、生きて居る物である、痛い事は同じく痛からう、辛い事は矢張り辛からう。假令、口に言語を操らないといつて無理してはならぬ、可哀想だといふ思想が表はれて居る。さきに私共一人一人の生存は、人類全體の恩にあるのであるといつたが、夫と同樣にまた是等動植物が生存して居ればこそ人間といふものが生存し得るのであるといふ理由がある。卽ち是等からも恩を受けて居るのであつて、決して疎そかには出來ないのである。これに就ては、佛敎の方では一層深い意味からして、一切の恩義を說明して居るのであるが、今玆には之を省略する。兎にも角にも、恩といふ意識の中には、實に一切生物の恩をも合せ含んで居る。更に進んで之をいへば、人類のみならず、生物のみならず、山や川や石や瓦の如き無生物にも亦同樣の恩義が存するのである。山は高く聳えて居る、水は清く流れて居る、其處に何の意味もなさそうであるが、實は矢張り多大の關係を持て居る、私共は、毎日平氣で空氣を吸つて生きて居りながら、夫れは自ら地球の周圍にあるのだ、これを器械的に吸込んで肺に入れて酸素を取入れ、炭酸瓦斯を吐き出す、唯夫れ丈けだと思つて居る。太陽は朝東から西に入る、否、出るのでもない、入るのでもない、地球自身が廻轉するから現はれたり隱れたりするのだ。其の現はれた時、人は自ら光線を受けるのだ、唯、夫れ丈けだと考へて居る。然し、果してそんな簡單な、冷淡な考ですむのであらうか。彼の卒然として去る、窓に映じた雀の影を見る樣に、意味もなく見過して濟むものであらうか。空氣を吸ふには吸ふ丈けの深い理由があらう、關係があらう、恩義があらう。光線に觸れるには觸れる丈けの理由があり、關係があり、恩義があるのであらう。必ずおろそかに思ふては相濟まぬわけである。

## 哀れ牢獄の人

私は嘗て、某囚人を慰むる爲に監獄を訪れたことがある。典獄の案内に連いて往て見ると、一間四方程の薄暗い室に罪人が這入つて居る。四方は壁で、其の一方に、五寸四方許りの窓がある、夫れから僅に光線が差込んで、中は暗い濕つぽい空氣が、如何にも重くるしく沈滯して居る、實に陰氣である。二三十分、其處にあつて話をして居る間に、種々の事が氣付かれた。斯ふいふ所に十日も、廿日も乃至何年も住んで見るとしたらどうであらう。此の小さい鐵窓から這入る僅な日光が實に唯一の賴りである、力である。自分の痩せた身體を見る事の出來るのは、唯此の一の窓ばかりである、好きな書物を讀んで慰むるのも唯此の一の窓である。今は晝だ、今は夜だといふ分別も僅に此の窓によつて判ずるのみである。物的にも、心的にも闇黑な境遇に同情して、自分を慰めて呉れる唯一の光明はこ





の一道の光線である。斯ふいふ境遇を眞實に察して、そして、今の自分等を思ふて見たら、實に非常な幸福ではあるまいか。朝東にキラ〳〵と日光が輝く時、思ふ存分清冷な空氣を吸うて、大威張で肺臟をふくらませて居る。晝、大空に照り滿ちた、あの大光線を身に浴びて、自由自在に働いて居る。夕、西山に日が入る時、月や星を仰ぎ乍ら、夜風に涼氣を取つて居る。之をかの牢獄に居る罪人に比較して、何たる幸福の身の上であらう。平素何とも思はないで居た日光や、空氣が、實に自分に大なる惠を與へて呉れて居るものであると、つく〴〵感じた次第である。

茲に一寸注意しておくが、意識あるものも意識なきものも、凡てのものから恩惠を感受するといふことは、恩惠者の動機を絶對に善觀するといふことになるのであつて、少々理論に入るのであるが、之も全く佛教の無盡因果の思想から養はれたもの、涅槃經の悉有佛性や、法華經の常不輕菩薩の信仰で養はれた特殊の思

想で、佛教獨得の汎神論的信仰の道徳的發表として、當然の徑路に在るものである。從つて意識した恩惠であるか、偶然の恩惠であるかの問題を超越して居るので、快く、草にも木にも限りなき恩情を味へることが出來るのである。

要するに、恩といふ意識は決して狹い個人關係の間にのみ限られて居るものではない。私に直接交涉のある人は勿論のこと、まるで沒交涉と考へられる人にも動物にも、草にも木にも、山にも河にも——之を一括して言へば、天地の恩、法界の恩、卽此の宇宙全體から我々が永劫無邊の恩惠を受けて居る。斯の如き廣き意味を無意識の間に、恩といふ語の中に含ませて、私共の父祖は、之れを直感し經驗し、表現して居たのである。



## 恩は時間の制限を離る

最後に今一つ恩意識の內容に就て注意すべきことは、夫れが全く時間の制限を離れて居るといふ點である。先に恩意識が其の廣さに於て無制限であるといふ事をいつたが、今は卽ち時に於ての無制限を云ふのである。

世間には、恩といふ事を刹那的に考へる人もあり、又永くても五十年七十年の人間一生の間丈けを恩の繼續時間と考へて居る人もあるが、これは、恩といふ眞の意識を了解したものとは謂はれぬ。私共の祖先は、斯樣な限られた時間內に恩を制限されたことはなかつた。恩は實に今日も明日も、今年も來年も、十年百年の後、千年萬年の後、乃至無量永劫に盡くることのないものである。これはまた、單に將來に向つて無限であるばかりではない、過去に溯つてもまた無限である。喩へば恩を施した其の人が、刹那的に一寸思ひついた同情で惠んだといふ、そんな偶然的の恩であつても、其の由來する所を考へれば、決して偶然に出來ることではない。長い永劫以來の連結が有つて、そして、今茲に此の恩義となつて現は

るるに至つたのである。之も私共の父祖が「御恩」といふ心持の中に自ら伴つて居た内容の一つである。

## 恩意識と新道徳

上來述べた通り、恩の意識は一切に普遍であり、また空間的にも無制限である。言ひ換へれば、深さに於ても廣さに於ても、實に限りない所の意識である。夫れが而かも何等の理窟にもよらず、私共の父祖の間に、直覺的に而かも眞面目に知られ行はれて來たのである。茲に至て考へて見ると、現代の人々所謂新しい人々が、唯徒らに、新道徳新倫理といつて求め求めて、在來のものは、殆ど顧みる暇もない有樣であるが、彼等の眞に求める所、要求して居る所は、案外にも、數量的制限に充ちた、新しいものの中には乏しくて、むしろかへつて、私共の父祖が何の譯もなく持つて居た恩意識といふものが、卽、夫の要求を滿すべき重要なる資格を供へたものではあるまいか。一體、今の人々は、何もかにも西洋にかぶれ易い傾向がある。餘事は扨置いて、特に此の道徳思想に於て左樣に思はれる。成程西洋のものは、秩序正しく理窟の排列がうまく出來て居る。東洋の經書や佛書の樣に雜然とした大部をなしたものではなくて、小冊子と雖チヤンと整つて居る、理窟好きの若い人には讀み易く、解り易いであらう。けれども、道徳や宗教は決して表面に顯はれた書物でもなく、理窟でもなく、しかも深く人の心の奥に宿つて其を左右し、其の人の日常の行爲を支配すべき力あるものでなくてはならぬ。ましてや、過去數千年來、私共の父祖が思慮し、精練し、そして實驗し來つた所の、歷史的にも深き經歷ある思想を一朝に擲つて、顧みないなどといふことは、實に迂濶極まる話であり、またこんな態度で求むるものが到底滿されよう道理はあるまい。

今日の道徳といひ、信仰と稱する所謂新らしいものには、第一廣さがない、第二に深さが足らぬ。小さい個人を本位として、己れが〳〵と無暗に主張する。そして、其の己れが斯うしたら斯うありさうなものだと、チヤンと小さな數量的限界を加へ、狹くるしい區域を作つて、自分から自分を縛つて居る。ゆつたりした人と共に樂しむとか、打算を放れて人の爲に計るとかいふ所が殆ど無い。かかる狹い淺い思想を根柢として何の生命が得られやう。恩といふ意識、夫は遠い西洋の話でない、近く私共の父祖民族の間に永く傳つて來た深い根柢に立ち、廣く一切に行き渉つた力ある生命ある一の信仰である。「盡日春を求めて春を得ず、春は枝頭に在て既に十分」須らく本元に立歸らねばならぬ。假令、一度西洋思想に捕はれたといつても、夫れは最近の一現象に過ぎぬ、一點の曇りに過ぎぬ。さまよつて出た旅の息子が、冷い道路の風に曝されて、初めて親の懷の溫かさが判つて、再び故郷に歸る樣に、永い間養はれた遺傳的にも家庭的にも、風土の上からも人情の上からも、絶えず養ひはぐくまれた思想が、どうして根柢から消え失せやう、いつかはもどつて來る時があるであらう。吳々恩意識といふものは、非常に古い道德であつて、而も同時に、極めて新しい生きた信仰であるといふ事に、切に注意を希望する次第である。

## 不完全なる自覺

以上は私共の父祖の持て居られた恩意識の內容に就て、恩といふ心持は、赤いか黑いかといふ樣に、暫く他人の事として噂をしたのである。今、恩を他人の事とせずに、私共自身の心の上に感じたならばどうであるか、どういふ風に恩を感ずるのが正しい恩意識であらうか、此の事に就て些申し述べて見やう。

先づ自覺といふ語は、英語の Self-Conciousness に相當する言葉で、一言にいへ

ば、「自分に意得が出來た」といふ樣な事になる。然るに、意得が出來るにも十分と不十分との別があり、自覺にも深淺の別がある。そこで、恩を自覺するに就いても、不完全に自覺することあり、又は完全に自覺する場合がある。

不完全に自覺するといふのは、今世間一般に、ボンヤリと、恩といふて居るものが恐らく夫れであらうか。近い例でいへば、故郷の母親から、暖い衣物を送つて頂いた、是があれば此の寒さも十分凌げる、母親の御恩は實に難有い……と唯貰つた嬉しさの餘り母の御恩を謝する……斯ふいふ時の恩の意識が、私のいふ、不完全なる自覺といふのである。私が是迄に育つたのは父母の恩である、學問の出來たのは師の御蔭である、難有い事だ、といつた樣に、單に恩が、自分に現はれた功果のみを見て感謝する、夫れが卽ち不完全なる自覺である。

此の程度の恩意識ならば、其は恐らく何人も有する所の心持であつて、單に日本人や、東洋人ばかりではない、苟も人間たる以上は、古今東西未開不文の民と雖、何れも皆是位の意識は持つて居るであらう。否、人類ばかりか、物をやれば犬でさへ尾を振るし、撫でてやれば馬でも喜ぶ樣が見えるに徵しても、動物に於て既に此の種の意識の發現は見られるといつて差支がない。然れば、事實として世界人類の上に、此の樣に共通であるばかりでない、人類の間の倫理道德を導く如何なる敎にも斯の種の恩は說いてあるのである。親の保育してくれられた御恩は、ゆるがせに思ふてはならぬ、師の敎へて下さつた御恩は忘れてはならぬ。陛下のよく愛護し玉はつた高恩は報はねばならぬ。此の如き考は、世界の倫理道德の等しく敎ふる所であつて、是丈けならば、東洋や日本の特有でも何でもない。更に宗敎に於ては將にさうであつて、すべての宗敎は、皆恩意識を中心として立つて居るものである。祈れば神樣は、罪の多い私を救うて下さる、現世も來世も共に助けて下さる、その有難い御恩を忘れてはならぬといふ。卽ち神の恩といふ事が、玆に信者の心にとつて、重要なる中心點である。基督敎もさうである。マ

ホメット教もさうである。波斯教も印度教も皆さうである。今日識者の一笑に附して居る稲荷様や琴平様、成田の不動、中山の鬼子母神などに色々の願を持ちかけて、之を拜んでおる人達でも、中心に慥に此の何々様の御恩といふ心持が存在してゐるのである。此の如く特に道徳宗教といふ領域に限られずに、すべての人間の心持の中には、如何様なる形に於てか、この素朴的な恩の感じが潜んでゐて、折にふれては現れてくる。例へば、生物學者が顯微鏡を覗けば肉眼では、何でもない一つの草の葉が、實に微妙の構造と働きとを有して居り。道にころがつて居た一片の石塊にも、實に不思議な組織と眞理とを表して居る。物理學者が、物の光や力の實驗をするとき、化學者が實驗室に種々の元素を取扱ふとき、乃至天文學者が地球を一つの小遊星とし、是等が太陽を中心とし廻る群を太陽系とし、而して宇宙の間には此の太陽系と同様、若しくは、夫れ以上微妙複雑のものが、何萬何億あるか到底判らぬといふ廣大無邊の虚空や、星體を觀ずるとき、世は其の小なる方面にも其の大なる方面にも、等しく無限である、絶大である、微妙である、不思議である。渺たる人間の五十年、何といふ些細な事であらうと、自分の倭弱を知ると共に天地の不可思議に驚異するであらう。此の倭弱の念と、無邊廣大に驚異する感とを經て、爰に日々の生活を想ひ廻せば、油然と浮び來るのは、この日暮しの不思議であらう、其の念はやがて不完全ながら恩の意識となるであらう。先きに説きたる一般の神恩といふ思ひは、實に唯此の科學者の驚異の念が少しく宗教的に彩られたものに過ぎないのである。更に此の如き念は、特に畫家や音樂家や詩人に於て著しく見る所である。それ所でない、普通の我々と雖、霽夜天空を仰いで、星の光り月の影を拜んだとき、高山の頂きに立つて、廣き眼界を見下したとき、等しく起る所の意識である。かかる素朴な恩の思ひは勿論、尊むべき美しい人間の感情ではあるが、然しながら、恩の意識としては、未だ不完全たるを免れぬ。

要するに、恩の由來する所に思ひを及ぼさずして、單に其の當面其の結果のみを見て感謝する恩意識は、不完全なる恩の自覺である。取詰めていへば、斯る自覺は矢張り自分本位に立て居るのである。親から衣物を貰つた、これで寒さが凌げる。自分に都合がよい、だから難有いといふ。國王は國を治めて下さる、自分等を護つて下さる、だから忝けない。神佛は自分を救うて下さる、故に御恩がある。斯の如くにして、悉く御都合主義、極端にいへば、利害關係で御禮をいふに過ぎぬともいへる。之れでは、幸に恩の效果が自分に利益となつて現はれた場合は感謝もするが、折角骨折つて被下つても、效果の自分に及ばぬ時は恩を感せぬ事になるであらう。之を推して行けば、其の結果が若しも自分に害になつた樣な場合は、向ふの親切や骨折りに對して却て怨恨を起し、そして、所謂恩を仇で返す樣な事がないともいはれぬ。これは極端であるが、少くとも、自分が受けた效果の多少によつて、恩の自覺にも妙な數量を感ずる事になるだらう。之は畢竟、不完全なる恩の自覺の弊であつて、特に近來世に有勝ちの樣に思はれる。

## 完全なる自覺

然らば、完全なる自覺とはどんな事であるか、一言にいへば、恩を眞實に知るのである。先の不完全なる自覺は寧ろ享恩の方であるが、今此の完全なる自覺は卽ち知恩の方である。知恩卽恩を眞實に知るといふことには、凡そ二つの要件がある。其の第一は恩の由來する所を知ること、其の第二は報恩の意識を伴ふことこれである。此の二要件を具へて、始めて完全なる自覺卽ち眞に恩を知るといひ得るのである。

## 第一 恩の由來を知る

先づ第一に恩の由來する所を知るといふのは、恩の現はれたる結果のみを見ないで、遠く其の由て來つた經路を考察する。澤柳政太郎博士の語を借りていへば、溯源的――其の源に溯つて、恩の由來を知るのである。

○

## 親の恩について

先の例を引いていへば、故郷の母親が遠い旅に居る自分に衣物を送つて下され た、御蔭樣で今年の寒さも凌げる之も母の御恩だ、難有い、これは恩の結果を見て喜ぶのである。自分に都合がよいので禮をいふのである、之れ丈けでは眞に恩を知つたとはいはれぬ。今、此の淺い考から尙歩を進めて、扨、難有い、此の衣物を送つて下さる迄に故郷の母はどれほど苦辛をせられたであらう。手紙の上には元氣よささうに書いてはあるが、あの年寄つた母が忙しい其の中から、紡いで織つて、裁つて、仕立てて下さるには、幾夜も寢ずに働かれた事であらう、中の綿の暖かさうなのを見るにつけても、畑で仕上げたか買求められたか、何れにしても、自分に風を引かせまいとて、斯ふまで叮寧にして下さるには、どんなに苦勞をかけた事であらうと、母の手許の苦痛卽ち御恩の由來をよく〳〵推察して、そして最後に、「御恩であります、難有ふございます」といつたのでなければ、決して眞の恩自覺とはいはれぬ。卽、恩の由來に徹底するといふことが其處である。近頃の學校の生徒は、紙や鉛筆を粗末にすることは平氣である、鉛筆などは半分も減るか減らぬに新らしいのと取換へる、半紙や罫紙の新らしいので鼻をかむ位の事は平氣でやる。是等も實に親の御恩を深く知らぬからである。ペン一本、紙一枚、夫れは些細のものではあらう、併し、いくら些細であつても、父兄の汗や

膏の凝りである。身の苦勞はよしなくとも、之れを調へて下さる心の慈愛は決して一通りではない。假りに、親の御恩を全然別としても、尚其處に廣大なる恩の由來がある、鉛筆一本出來るまでに一體どれほどの世話がかかつてをるだらうか。鉛筆の心は多くの人夫が山から掘り出して之を精製したものである、木は遠い外國から海を經て輸入したものである。此の心を此の木に入れるにも、又幾多の人力手工を費して居る。自分が敎場で雜作なく之れを使用するに至るまでには、實に莫大の人の苦心がある。此の恩惠によつて今玆に手に入る事の出來たのである、思へば勿體ない事である。一本と雖、無暗に費す事が出來やうか、鉛筆ばかりでない、世のすべての物が然うである、人の何とも思はぬ些細なものにも、由來を察すれば實に非常な苦心が籠つて居る。私の生れは米の出來る越後の國であるが、幼い時分から一粒の米でも粗末にすると罰が當つて、眼がつぶれるぞと祖母や兩親にいひ聞かせられたものである。何故と聞きかへせば、いつでも、米一粒が立派に出來上るまでの農家の苦辛苦勞を細かに說明して、「だから勿體ないぢやないか」といはれたことを記憶してをる。今から思ふと、祖父母は實に立派に恩の由來に徹底して居られたものと感ずるのである。



## 師の恩について

師匠の恩といふ事に就てもさうである、近來は、師弟の情誼などゝいふ事は、殆ど冷却してしまつて居る。之には色々の理由もある事ではあらうが、何はともあれ、敎を受けるといふ事は、當面の效果は先づ措いて云はずとしても、數ある先生の中から、其の先生が特に敎場に出られて、又、數ある幾萬の生徒の中から、特に其の生徒が敎場に出て、斯くして敎を授け又之を受けるといふことは、決して偶然に起り得る話ではない、實に容易ならぬ溯源的恩義上の因緣の結果である。

一字を習ふといふ事は、字一字の價値はともあれ、之を授くる先生の苦心、之を授くる爲に先生が過去に努められた勉強、夫から夫へと考へれば、實に無盡の恩惠に想ひ到るのである。茲によく考へもせずに、單に一日一時間の師であるといふ樣な冷淡な考を持つては毛頭相濟まぬ次第である。

## 君の恩について

陛下の御恩は更に尊い。此に於ても、單に今日國を治めて下さる、民を惠んで下さるといふ所にのみ、恩義を限るのは非常な誤りで、陛下が茲に到らせられた御一人の御軫念、更に陛下の御先代、歷代の帝祖、神武帝、天照大神と其の先き〳〵に恩を及せば、今日大正聖代を實現する爲に、二千五百有餘年間、非常な御苦心遊された結果であるのみならず、私共の父母、祖先、皆この陛下の御先代の御惠みに浴したのである。更に顧れば、此の自分といふものが、時もあらうに、今日の世に生れて來て、國もあらうに、日本帝國に生をうけ、そして、今上皇帝に仕へまつるといふことは、之れ又實に偶然の事では決してない。一河の流れ、一樹の蔭、皆多生の緣によるといふ、まして此の世に君臣となる關係は、實に、多生曠劫の深ひ關係によるといはねばならぬ。

## 佛の恩について

更に進んで、神佛の恩に就ても亦同樣である。今日比較的新しい人々の宗教的信仰を說く間には、往々、此の「由來」を疎かにして居る傾きがある。佛の御慈悲は難有い、罪惡の私、煩惱の自分を救濟して下さる、何たる廣大な願力であらう、御慈悲であらうとひたすらに喜ぶ。夫れは、元より結構なことであるが、之れ丈

けでは、佛の慈悲の廣さが幾分判つたのみに過ぎない、まだ其の深さを見るに於て些、遺憾がある。深さといふのは、卽ち佛の御慈悲の由來である。斯る不思議の願力を顯はし無限の慈悲を施し玉ふに至つた佛樣の御艱難、御苦勞は如何ばかりであつたらう。聖者を救ふ神はある、善人を助ける菩薩はある。併し、斯の如き無善造惡の凡夫をば其の儘光明に攝め取つて下さる御本願を御成就下されしは實に大悲の如來樣ばかりである。慈悲が廣大なれば廣大なる丈け、本願が不思議であればあるだけ、之を建立し之を成就し給ふ爲に嘗められた艱難、經て來られた苦勞、夫れは、どんなであつたらうと、遠き御修行の古へを察して、愈廣大の御恩を喜ぶ、其所が大切な所である。眞宗では、五劫の御思惟、永劫の御修行といふことをよくいふ、卽、如來の御苦勞の長かつた事をいつた語である。之れは單に佛樣ばかりではない、此の敎を印度から支那、支那から日本へ傳へて下された三國の敎祖の御苦勞、及、日本の古代から今日まで傳承し下された善知識、

百重千重積り集りて此の身に注がれ、皆悉く「御恩」とよろこぶ心持の一分に含まれるのである。

## 由來を知りて始めてよし

以上を總括すれば、天地萬有、有象无象、悉く偶然に現はれるといふ事は決して無い、皆夫々深い廣い因果の法に依て現はれたものである。之を自分といふ立場からいへば、其の意識することに論なく、天下のあらゆる者、一塵一毫の微小なるに至るまでも、私共は皆其から由來の久しい恩惠を受けて居るのである。之は決して、徒らに誇大の言を弄するのではない、實際其に相違ない事實である。而して、玆まで恩の自覺の及んだのが卽ち恩の由來に徹底したといふのである。具體的にいへば、私共は日常の生活に於て接觸する事々物々に就て恩とい

ふ心持を失ふてはならぬ。其の恩を知ることらといふ様な、效果の如何を問はないで、事の茲に至るまでに費された隱れたる犧性ともいふべき苦心の經路、卽由來を察して、よく恩が仇になつて現はれやうとも、之に對して、一々深く其の由來を知り、其の始終に向つて感謝せずには居られぬといふのである。

## 第二報恩の念を伴ふ

第二に報恩の意識を伴ふことといふのは、自分に賦與された恩は如何なる性質のものであるかといふ事をはつきり知れば、如何しても、報恩の意識を伴ふことが起らずには居られないことである。此の點は、上來縷々披瀝したる端々に繰り返したる事ではあるが、また取纏めてはつきり、茲に述べておかねばならぬ。



## 恩の本質を知るべし

恩の本質は決して物品ではない、飽迄、向ふの心持ち、親切を頂くのである。例へば、隣家からお萩を戴いた、お腹のすいた時はうまいが、今夕飯たべた計りだといふやうな時はうまくない、甘いときは餘計に恩を感じ、甘くない時は餘り難有く思はぬ。此の如きは卽恩といふものを、物品として居るからである。たとへ自分の腹の具合はどうであらふが、お萩の出來ばへがどうあらうが、夫が甘からふが、まづかろふが、送つて呉れた親切には替りはない。向ふの心持を頂いて、難有ふございますと頂戴する、是非さうなくてはならぬ。親から財產を讓られた、夫には、色々の高下があらう、金滿家は何十萬何百萬の家產を子に讓るであらうが、貧乏人は僅かな家具や臺所道具を讓るに過ぎないだらう。然し、讓ら

れた物の多少によつて、受ける息子の心持に、若も、多少でも、恩の高下を感ずる様な事あらば、夫れは實に、恩の本質を辨へざる不孝の兒といはねばならぬ。よし、どういふ等差はあれ、親が一代苦心せられたものを、鍋釜一つでも全部を捧げて子に讓らふといふ親の心持、親切には決して變りはない。彼れは何十萬の財産があるから讓れるのである、此は何にも無いから讓れないのである。併し、讓る親の親切心には彼此何の差別があらう。古人の語にも「三千世界に子を持つた親の心は皆一つ」といふが眞にさうである。よし、此の場合に、財産どころか借金を添えて讓らるるやうな事があつても同じ事である。子を思ふ親が、其の子に借金まで讓らねばならぬといふのは、夫はよく〳〵の事であらう。人間一生には運と不運とがある、種々の難儀や不幸に出合へば、思ひ乍ら借財も出來やう、多くの財産を讓る親よりも、借金を讓らねばならぬ樣な親は一層苦勞艱難せられた親である。事茲に至るまでには、どんなに老の身心をなやまされた事であらうと、

讓られた子は、尙一層親の御恩を思はねばならぬ。

之に就ても、今日の文學者、特に自然派と稱する人達の中には、刹那の感じといふ樣な事を無暗に尊重して、前後を辨へず、由來も本質も何もかも捨て措いて、其の刹那自分の胸に一寸起つた放縱な勝手な所感を公然述べ立てて得意として居る者がある。頂いたお萩に對してでも、向ふの親切や苦心を些か察しもせずに、まづいつまらぬ位の事は遠慮なくいふ。それはまるで、火は熱い、水は冷いといふのと何の區別もなく、全く動物性の反射運動を發揮したものに過ぎない。是れでは折角茲まで進んで來た人間を太古の動物界に引き戻さうとするも同樣である。一方からいへば、こんな心持ちで皮肉に食べるから、實に甘いものもまづくなるのである。同じものでも、向ふの親切といふ事をツク〳〵味ふて、心持ちよく食べれば、實に其味も甘い。心持ちに依て味は替るといふ事は、私共毎日の食事でお互に心得て居る事である。

之に就て、私は或時恩の話をしたとき、一人の師範學生が訪ねて來ていふのに、「私は仰の如くどうかして親の御恩といふ事を思ひたいと存じて居ますが、どうも思はれない。夫れは、私の親は相場をやりまして、澤山の財産をなくした爲に、私は非常に苦しい生活をせねばならぬ樣になりました。私は斯ふいふ身の上から親の恩を思はうとしても、どうしても思はれない、無理に極めても直きに胸の底かも打ち壞す樣な氣が起つて、どうしても難有い感じがしませぬ、どうしたものでせう』と歎くのである。斯ふいふ例はいくらも世の中にある事であらう。成程、道理である、が、併し考へて見たら、親は相場を何の爲にやつたのであるか。あるが上にも金を蓄へて一家子孫を繁昌させたい、恐らくはさういふ所から起つたものに相違ない。少くとも、失敗を望んで相場をやる人は天下一人もないであらう。卽ち其の現はれた結果はまづいが、一家を繁榮にさせたい、卽ち子孫の爲にしたいといふ親の苦心は茲にも明らかに認められる。勿論其の方法としては實に誤つた遣り方ではあるが、夫れは形式の上である。恩の意識は飽くまで其の本質、動機に立入る考である、殘された財産の多寡や方法の誤りの如き枝末の問題に精神を煩さず、直に其の本質、子を思ふ親の心持に立入つて見たらどうであらうと申し聞かせた次第であるが。幾度も繰返す如く、ともすると、人は、恩のあらはれた形に迷はさるる爲に、大切な知恩の念に缺くるところが起つて來易いのである。

## 恩を知り恩に報ふべし

斯ふいふ風に、恩の由來と本質とを深く味つて見れば、直に心に起ることは、「受けた御恩を自分一個に私してはすまない」といふ一事である。頂いた御馳走は、非常な苦心親切の結果である。たとへ向ふの人は、自分一個に與へて下さつたの

であつても、受けた自分は獨り之を占めてはならぬ。近くは親兄弟や妻子に分つて向ふの親切をなるべく廣く分配して、共々に之を樂しみ喜ぶといふことが大切である。父祖から財産を讓られた、讓られたは自分であるが、併し此の財産の由て來る所、之を讓つて下された親の親切、さういふ事をツク〳〵考へれば、之を自分一個のものと心得ては濟まぬ、之を以て、一家の爲、兄弟の爲、親戚の爲、廣くは社會の爲に盡せる限り盡さねばならぬ。兄弟や親族が不幸に陷つた場合、國家に一大事の起つたとき、斯る機會には及ぶ限りの力を添えねばならぬ。夫れは決して自分がするのではない、父祖から受けついだ御恩の分配である。又一場の講話を聞いたにしても、之を聞く事を得たのは容易ならぬ御恩である。講話會を開くに至るまでの會主の苦心、講師が其の席に出づるに至つた因緣、且は自分が其の席に列するを得た幸福、講話に依て得た敎訓、受けた知識、夫から夫と考へて見れば、一場の講話と雖忽せに成立したものではない。其の由來、其の本質、思へば思ふほど不可思議の緣である、斯ふいふ緣は獨占してはならぬ。次ぎには、是非友人の誰彼を誘ふてやらう、今日聞いて感じた話は之を家族に聞かせてやらう、友人にも知已にもこの吉方を分たうといふ所謂人と共にする氣持になる。簡單な樣ではあるが、斯る所が卽ち完全なる自覺を得た所謂知恩の人の特色である。

元來、人が自身の一部を削つて之を他に賦與したのが恩といふものである、其處に既に個性を離れた廣い意味の犧牲の心を含んで居る。與へた人は既にさうである。受けた自分が之を扱ふにも亦其の樣になくてはならぬ。世に恩を受ける人はいくらもある、併し受けて之を頒つ人の至て少いのは、恩の由來や本質に徹底して居ないといふ點に基く事と思ふ。

## 恩の完き自覺

繰り返して更に之を一言すれば、人から恩に預つた、御蔭で斯ふいふ仕合を得た、誠に難有いといふ感謝の念の上に、更に深く突き込んで、此の恩を私に給はるまでの其の人の善意の由來といふものをよく察し、同時に形にあらはれた所は、量に於て是々の限りもあらうが、隱れてゐる向ふの親切な心持には限りがない。其の所を難有く頂戴する、斯くして受けた御恩は、自分一人に私してはすまぬ、及ぶ限り廣く他と共にし、共々にこれを樂しみこれを喜ぶといふ事を深く心に置て、そして日常の生活を送つて行く、これが卽ち眞に完全なる恩の自覺といふものである。



## 恩の教への尊さ

斯ふいふ意識は、私共の先人の間には、知らず〳〵了解されて居た考であるが、それが今日漸く衰頽し來つたが爲に、更に振り返つて其の內容を採り、其の由來、其の本質といふやうに其の心持ちを採り究めねばならぬやうになつて來た。卽我國の全體思想界が、殆ど西洋の個人主義やら自由思想に傾き、おまけに、其が誤まられてゐるので、極めて外形的な權利義務に囚れてしまひ、極端になると、いが蟲のやうな自我だなどといつて騷ぎ、少しも、人生の差別相の妙味が分らず恩といふ意識が我等の生活內容を豐富にすることを知らぬ。これは一面からは大に歎はしい事柄といはねばならぬ。勿論、新らしいもの〳〵と追及するも、進歩の上に必要の事ではあらうが、之が爲に大切な種子のあるものまでも、古いといふ一言の下に放擲して、無暗に、前へばかりあせらぬ樣に、私共父祖の有して居

られた思想の中には、却て長年月の精練を經て來た、實に麗はしいものが存して居ることに注意する必要を痛感するのである。恩意識の如き、特に心を靜めて味ふべき、深き廣きいはれのあるものであるといふことをくれぐれも記憶し、進んで、共々に、これを自分の身に味はせて頂くといふことを切に願たいのである。

共に道を求めて終

大正十二年七月二十九日印刷
大正十二年八月　一　日發行

〔共に道を求めて〕
定價金壹圓

版權所有

著者　東京市小石川區原町十八番地　島地大等
發行者　東京市本郷區西片町十番地　木村善堯
印刷者　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　柴山則常
印刷所　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　合資會社杏林舍

發行所　東京市本郷區森川町三十八番地　光明閣
振替口座東京五四一三二番　（電話小石川二六七〇）

發賣所　東京　光融館
東京　森江書店
廣島　洗心書房
大阪　宗教書院
京都　興教書院
京都　法藏館

# 光明閣發行圖書目錄

醫・文學博士　富士川游著

## 眞實の宗教

定價金一圓
送料金六錢

文學博士　前田慧雲著

## 凡人の宗教

定價金三十五錢
送料金四錢

大谷光瑞著

## 佛教の要諦

定價金七十錢
送料金四錢

文學博士　南條文雄著

## 見眞大師略年譜

定價金二十錢
送料金二錢

廣島高師佛教青年會編

## 生命の深み

並製金一圓八十錢
特製金二圓
送料金十二錢

文學士　泉道雄著

## 家庭と宗教

定價金七十錢
送料金四錢

文學士　泉道雄著

## 日常生活と宗教

定價金二十五錢
送料金二錢

文學士　泉道雄著

## 親鸞聖人

定價金二十五錢
送料金二錢

文學士　泉道雄著

## 信仰の話

定價金二十五錢
送料金二錢

光明閣編　講演資料

## 立教開宗

定價金一圓
送料金六錢

504
220